

603-101



603

101

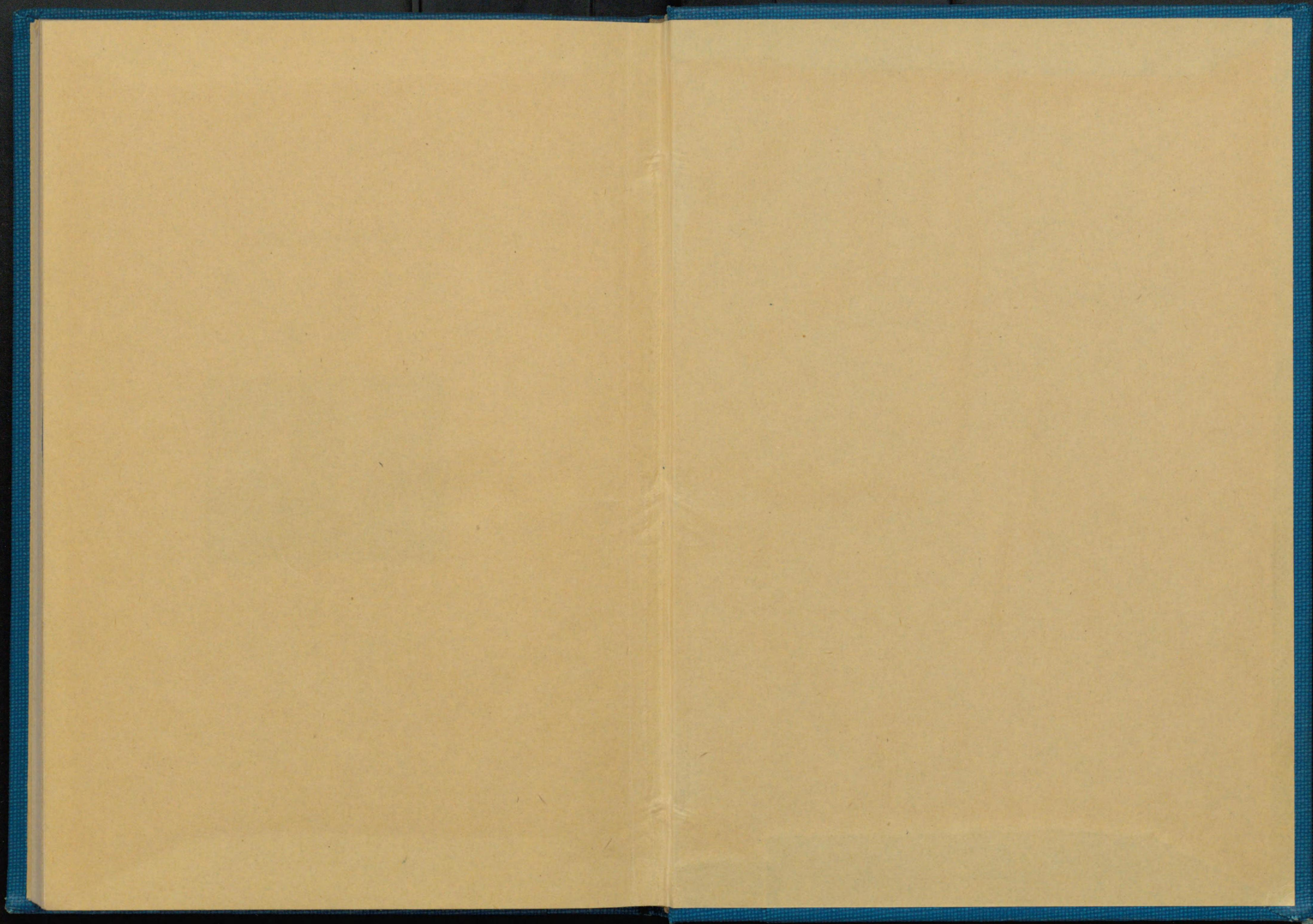
事故本

書き込みあり

目次ページ

内容の判読可能

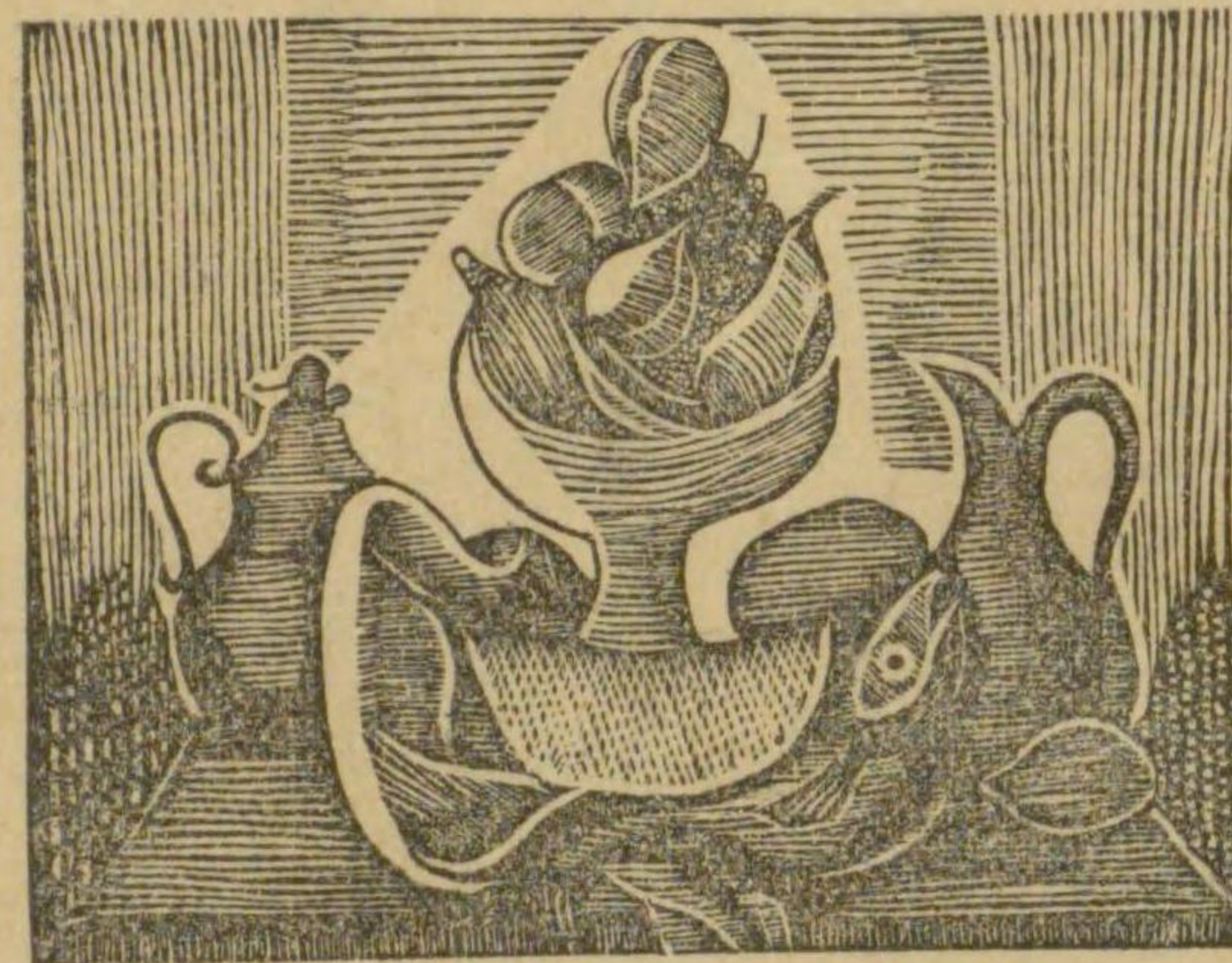
2007.4.20発見



コ1588



グンニウラブ
集詩



京東
房書一第



603-101

私は諸君に詩を書くなといはない。私は諸君にブラウニングに往けといはない。然して諸君の詩は……今日の詩であり、しかも明日の詩であらねばならない所の詩は、ブラウニングが信じたやうな詩的立場から新たに出發しなければ駄目だ。そして私は本譯詩集を諸君にすすめて反省を煩はしたい。

序 詩

あなたは人生のバゼントを官能で見る喫煙室の物語師。

あなたの爽快な辯舌はあなたの藝術を朦朧化させ、

また朦朧を變じて告別の辭たらしめる、

あなたは奇矯な誇りで裏書された田舎氣質だ。

あなたは時に虚無主義からただ逃れるため群衆的であり、

あなたの大きな表現の濁はあなたを偉大な傳奇作者

たらしめ、

残忍に見えるため、あなたはしばしば神祕啓示を

遊戯する。

あなたは色強い冒険の大食家だ、

天國と人生との間をセレネードするトロバドールだ、

六絃琴に合はせるあなたの愛歌は、私共に肉體的苦痛さへ

感じさせる。

あなたは現實家だが、不思議に眼を樂天主義に向ける。

あなたは人情の火の上で氣儘に踊る鷺頭獅身だ。

目次

アンドレア・デル・サルトオ	Andrea del Sarto	三〇
軽い女	A Light Woman	四二
肖像畫	A Likeness	五〇
愛國者	The Patriot	五〇
ポルフィリアの愛人	Porphyria's Lover	六四
實驗室	The Laboratory	七一
僕の前公爵夫人	My Last Duchess	八二
佛陣營の一挿話	Incident of the French Camp	八八

懺悔	The Confessional	九三
失はれた指揮官	The Lost Leader	一〇一
海外より故郷を偲ぶ	Home thoughts, From Abroad	一一一
海上より故郷を偲ぶ	Home thoughts, From the Sea	一一五
夜の婦曳	Meeting at Night	一二一
朝の別れ	Parting at Morning	一二九
人生に求むる愛	Love in a Life	一三三
追憶	Memorabilia	一三四
デ・ガステブス	"De Gustibus"	一三九
廢墟に於ける戀	Love Among the Ruins	一四五
婦曳	Confession	一四七
女の最後の言葉	A Woman's Last Word	一五三
失はれた戀人	The Lost Mistress	一五九
二聲曲	From "In a Gondola"	一六三
小唄		一六七
小唄		一六九
小唄	From "Pippa Passes"	一七六
前を望め	Prospice	一七六
跋詩	Epilogue	一八二
後記		一八七

ブラウニング肖像(扉挿繪)

23

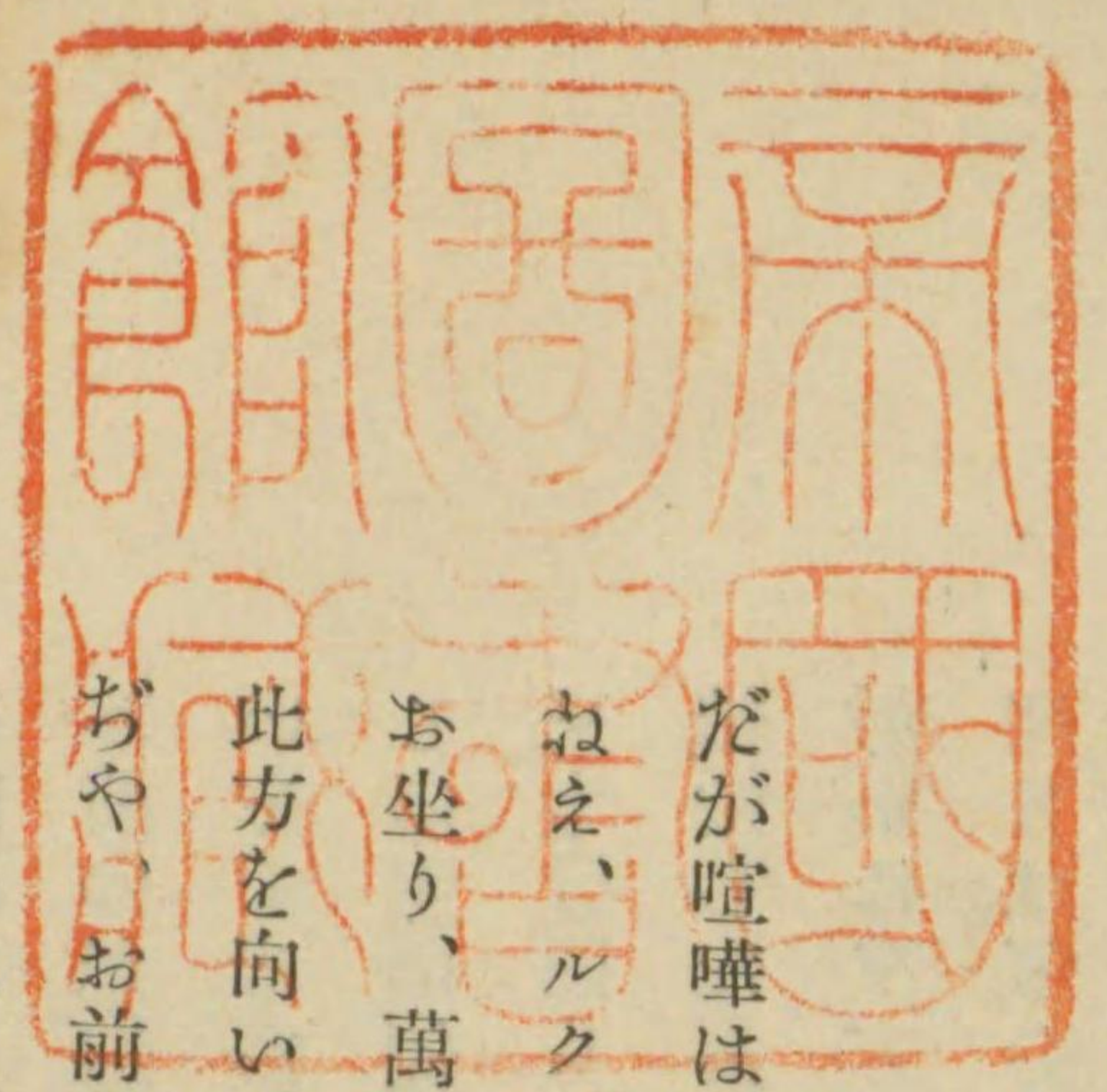


グンニウラブの頃歳十四

ブラウニング 譯詩集

アンドレア・デル・サルトオ

(一名『無缺點の畫家』)



だが喧嘩はもう止めにしよう、
ねえ、ルクレチア、今度だけ我慢して呉れ、
お坐り、萬事お前の希望通りなるだらう。
此方を向いてゐるのはお前の顔だけで、お前の心はどちらを？
おやお前の友人の友人に繪を描いてあげよう、心配しなさんな、
肖像の取扱方も先方の意に任せ、
時間も云ひなり、潤筆料も申出通りにしませう、
そして次にお前の手を握る時、

それへお金を入れてあげよう。ねえ、それでいいだらう。

私は先方の満足するやうに繪を描いてやる……だが明日のことだ。今晚はいつも以上に、

お前の想像以上に疲れてゐる、で、

いやでもあらうが、お前の手を握つて

この窓の側に一緒に坐つて、

三十分間もフキエソーレの町を眺めてゐたい、

結婚した男女のやうに心を一つにして、

静かに夕方を過すと、

明日は氣分が愉快にはつきりして

仕事に取りかかれるであらう。ねえ、さうさせて呉れなくて。

明日お前は私の意に従つたことをどんなに喜ぶか知れないであらう。

お前の柔かい手がそれだけで一人の女だ、

私の手は男子の胸で、そのなかにお前の手の女が渦を巻く……

時間潰しだと思つて呉れるな、お前はモデルになつて、

描かなくてならない五枚の繪にお手傳して下さいなね。

さうです、さういふ風に此方こちらを向いて……

まるでぐるぐるとどくろを捲いてる蛇のやうに美しい！

よしんば眞珠貝を嵌めるためだとしても、

どうしてお前は完全な耳に穴を開けなすつた。

おお、麗はしい……私の惚れ惚れする顔、私の月様、誰のでもある

私のお月様……

このお月様がこちらをお向きなされると、

誰もかも眺めて自分のお月様だと呼んで、

順々に見とれる、誰のものでもないお月様……でも可愛い

お月様だ。

お前がにつこり笑ふ……あはあ、そのまま私の繪だ、
畫家の口にするハーモニーといふ奴がそれに出てゐる。
灰色が流れて何もかを銀鼠に包んでゆく……
薄暮の微光にすべてのものが、お前も私も包まれる、
お前は私を夫として得意であつた最初の刹那姿……
(それは過ぎた昔語になつたが)……それに引きかへ、私は
彼方のくすんだ愉快なフェンソーレとよく和ぎ合つて
私の青春希望藝術を權化するすべての時間を表現してゐる。
お寺の頂上からは鐘が鳴つてゐる、
道の向う側に續いた尼寺の長い塀は
樹木を安全に圍つて、樹木はなかで恐ろしく茂つてゐる、
最後の坊さんが庭を立去り、日は沈んでゆく、
秋は深くなり、見渡す限り荒涼たる秋だ。

ああ、すべてのものが一つの形になつてゐるやうだ、
私の仕事と私自身と持つて生れた使命とが一つの薄暮の作品に
なつてゐるやうだ。ルクレチアよ、私共は神様の掌中に握られて
ゐる。
私共が過ぎさねばならない一生を考へるとほんとに不思議だね、
自由らしく見えて、しかもこんなにしつかりと縛ばられてゐる、
神様は足枷を置き給うた、ままよそのままに抛つておけだ。
たとへばこの部屋だ……お前の頭を振り向けて御覽な、
後に私の作品が澤山ある。私の藝術がどうのかうのと云つたつて
お前は理解しようとしな、まだ理解することが出来ない、
だが人が何と云つてゐる位は聞いて呉れさうなものだ。
してあそこにある下繪、戸口から二枚目の繪を御覽なさい……
かう來なくてはならない繪だ、

本當のマドンナの繪だ……かう私は立派にいつて退ける。

鉛筆一本さへあれば、どんなものを見ようと知らうと、

心の底から描いて見たいもの、是非突込んでみたいもの、

どんなものでも私に描ける、また樂々と描ける、

或は口はばつたい言分かも知れないが、

私は完全に描いて退ける。先週法王の代理が何といった、

また人々が佛蘭西でどう評判してゐるかを、お前は聞いた筈だ、

お前自身に私の價値の批判が出来る。

兎に角、すべての繪が私には樂な仕事だ。

最初に下繪を描いたり習作を試みるなどは、昔のことだ。

多くの畫家が一生かかつて夢みてゐるものを……

夢みてるばかりでなく、實行しようとして苦しんで、

遂に失敗して仕舞ふものを私は樂に描いて退ける。さういふ畫家を

このフロレンスだけでも、お前の指で二十人も勘定することが

出来る……

お前は他の畫家が、お前が通りすがりに着物の裾で

うつかり擦つて仕舞ふやうな詰らない仕事に努力して、

ある人がいふやうに、しかも効果をあげないことを知つてゐない……

(かういつた人の名前はあげられるが、どうでもいい)……彼等は

實に効果をとんとあげない!

だがルクレチアよ、あげないのでなく却てあげてゐるのだ、私は

批判されてゐるのだ。

私は脈搏の弱い定規に嵌つた職工の手を動かすに過ぎないが、

神様の眞實な光が彼等に、

彼等の惱しい動悸の、一杯詰め込まれて塞がれて仕舞つた脳髓に、

いな心清の中に、それとも何だか知れないものに彼等に燃えてゐる。

彼等の仕事は地上を這ひずつてゐる、だが彼等は、
よしんば地上へ歸つて言葉で語ることが出来ないにしても、
私には閉ざされてゐる天國へいくたびも到着し、
入り込み、確に彼等は天上の座席を占めてゐる。
私の仕事は天國に接近することが出来るけれども、地上を離れない。
ああ、如何に急激に彼等の血の燃ゆることよ、彼等を賞讃すると、
それが泡立ち、彼等を非難すると、それがまた等しく泡立つ。
私は自分の思ふ所を自分のために描いてゐる、
で私は何をしてゐるかを知つてゐる、人の非難や賞讃では
とんと動かされない。假りにある人が
モレロ山の輪郭が本當についてゐない、
また色も間違つてゐるといふ：それが何であらう。或は逆に
輪郭も結構で色の順序もいいといふ。それが何であらう。

人間が勝手に喋つた所で、山はわれ關せず焉だ。
だが人間の到達範圍は制限を越えて居らねばならない、
さもないと天の存在は何の爲めかと問ひたい。私の藝術は
すべてが銀鼠だ、溫和だ完全だ。それがいけないのだ。
自分に缺けてゐるものをどうすれば立派になるかを私は知つてゐる、
でも單にそれを知つて、自分ともう一人の人間が
二つの頭を一つにして世界を眺めることが出来たならばと、
こぼしてゐた所で何の役に立つ筈がないのだ。
向うにあるのが五年前に死んだ
アルビノ州出身の有名な青年の作だが、
(あれや模寫でジョルジオ・バザリが送つて來たものだ)
私によくどうして彼がこの作をしたかが想像される、
定めし彼は王様や法皇様の面前でその魂を注ぎ、

彼が技巧を超絶してゐるので天が彼に補充する所が

あつたのである、御覽なさい、技巧はすつかり負けてゐる。

あの腕の描き方は悪い……技巧と精神の問題が再び出て来る……

描線の缺點、所謂肉體の描き方に

缺點があつてもそれは許さるべきもので、繪の魂は正しい。

彼は正しい仕事をしてゐる……それは子供も知つてゐる。

それにしても何といふ腕であらう。私はそれを直してやる事が出来る。

けれどもその閃動、洞察、伸展の點に……

ああ、私以上だ、私以上だ。して何故に私以上だ。

若しそれ等のものが私に與へられ、即ち魂が私に與へられたならば、

私もお前もラファエルになることが出来たのだ。

とは云へ、ルクンチアよ、お前は私の頼んだことの凡てをして

呉れた：

幾層倍も過分なほど私に勉めて呉れた。

けれどもお前が……その同じ完全な額と、

完全な眼と完全すぎる口許と。

私の魂が鳥が鳥差とりさしの口笛を聞いておびき出されるやうに、

愉快に響くお前の低い聲とにつけ加へて、

お前の精神を呉れることが出来たならばと思ふのだ。

世の中のある女はさうして居る。若しもお前の口から、

『神様と御榮みぶかえ！ 金などに動かされるな。

現在を未來あしたに比較してその輕重はどうだ。

アンジェロと共に死後の名譽に生き給へ。

ラファエルは天で待つてゐる。三人手をつないで神様の御前へ

進め』

と私に迫つたならば、私はお前のためにさうしたのであらう。さう
出来さうに見える。

或はまた出来ないかも知れない。考へると萬事は神様のお思召にある
のだ。

また感激は各自の魂自身から來るもので、
他のものは如何ともし難い。然らば何故に私がお前を必要と
しなければならぬか。

ラファエルにもアンジェロにも妻はなかつた筈だ。

そして思ふに、成し得るものは成すことを欲しない、
けれども意志力は何ものかである……何ものかの力だ、
私共半人前の人間はかく奮闘してゐるのだ。最後に
神様は報酬か懲罰をお與へなされると私は信じてゐる。
天の報償が厳しくて、私は安く評價されてゐる、

實際に長らくの間不遇の地に置かれてゐるといふことは、

寧ろ私に取つて安全だと云へる。お前は知つてゐるであらうが、

私は道で巴里の貴族達に出會ひはせぬかと心配して、

終日家外へよう出ないことがある。

彼等が横を向いて通つて仕舞つて呉れると結構だが、

時には彼等が私に話をしかける……私はそれを我慢してゐなければ
ならない。

まあ、何とでも云ふがいい。フォンテンブロウの思出、

フランシス王と最初の會見、それに長いお祭騒ぎの年……

人情深い偉い王様の黄色こんじきに輝いた面前で、

私は確に時には平凡な地上を離れて、

ラファエルの常に纏つた光榮の畫境に立つことが出来た……

王様は一本の指を頤鬚や微笑み給うた

口端の髻くちまげに觸れ給ひ、

その一つの腕を私の首の廻り肩の邊ほとりに載せられて

黄金の鎖くさりを私の耳近くチリンチリンと鳴らされた。

私は王様の呼吸いきを浴びて誇りげに、

王様を取りまく朝臣は王様の眼をその眼として……

正道な佛蘭西人の眼だ、盛んに炎える焰のやうな佛蘭西人の魂だ。

私は彼等の心に答へて自分の手を働かせた……

けれども最も嬉しかつたことは、背景に立つた

お前の顔を遙に思ひ浮べ、お前に喜ばれるといふ最後の報償が

私を待つてゐて呉れると思つたことであつた。

ああ、全盛期であつた、王様のやうな生活の日であつた。

その時お前が焦れつたくなりさへしなかつたならばと思ふが……

もう

それは過ぎたことだ。私の本能の語つた所は正當であつた、

その時私の生活は派手な金色こんじきになりすぎてゐた、灰色でなく

なつてゐた、

私は視力の弱い蝙蝠で、四つの壁を世界とする

穴倉からどんな太陽も誘ひ出すことの出来ないやうな人間だ……

私の佛蘭西生活の結果や知るべきのみであつた。

お前は私を呼んだ、私はお前の胸へ歸つて來た。

勝利の曉に私はお前の胸を擁して横はることであつた、

今勝利前に既にそれを實行したとすると、何物も失はれたのでない

ことになる。

美麗なルクレチアよ、私のものであるルクレチアよ、

私の手を額縁にして金髪に包まれたお前の顔を圍みたい。

『ラファエルはこれを作つた、アンドレアはそれを描いた。』

祈禱する時ラファエルの方が遙に優れてゐる、然しアンドレアの聖母は彼の妻だ」と

人々は私を許して呉れるであらう。お前の前で二つの繪畫を批判することは喜ばしい。私は私より優れた運命がはつきりとして來るのを考へてみたい。

ルクレチアよ、お前が知つてゐるかどうか知らないが、神様の存在のやうに誠の話だ、

ある日アンジェロ自身がラファエルにいつたさうだ、

私は今まで長年の間自身だけに納めて置いたことだが、

(その當時ラファエルは思想に燃えて居つた、羅馬の宮殿の壁の上に坐つて、

その壁畫のために心も共に天に沖して居つた、)

『ねえ君、フロレンヌの町を往つたり來たりしてゐる見すばらしい

一青年がゐる、誰も彼に注意を拂はないが、

若し法皇や王様達に催促されて、君のやうに

設計成就まで任されたならば、

恐らく君も額に汗をかかねばなるまいよ。』

もう一度ラファエルに戻るが：：實にこの腕はいけないね。

直すのも如何だが：：ただお前だけが見るとして、

早く白墨チヨリクを貸して御覽、線といふものはかう引くべきものだ。

でも繪の魂の問題になると、彼はラファエルだ、消して仕舞つて

下さい。

若し彼が本當のことをいつたとして、

彼つて、もち論ミケル・アンジェロのことで、

もう彼のいつた言葉を忘れたの)

そして私にああいつた機會が失はれて仕舞つたとしても、

私のただ希望する所は、お前が……恩知らずでない……いえ、

お前をもつと喜ばしたいといふことだけだ。

ああ、私にさう思はして置いて下さい。お前は本當に笑つて呉れた。

この一時こそ本當の一時であつた……もう一度笑つて呉れるの。

お前がかういふ風に毎晩一緒にゐて呉れるならば、

私がどんなにいい仕事が出来ることがお前に分るであらう。

御覽な、もう日もとつぷり暮れた、星が出てゐる。

モレロの山は見えない、夜警の火で城壁の所在が知れ、

梟は名詮自性ふふと鳴いてゐる。

ああ、ルクレンチアよ、窓を離れよう……

最初は喜びの積りで作つたが

憂鬱な家となつて仕舞つたこの小さい家のなかへ

入りませう。神様は正當でおはします。

フランシス王は私を許し給ふであらう、が、時々夜になつて、

私が疲れ切つた眼を畫布から離して見上げると、

部屋の壁が、煉瓦の一枚一枚がはつ切りと輝いて、

漆喰のかはりに恐ろしく光る黄金……

私がセメントにして仕舞つた王様の黄金となつて眼前に顯はれる。

私共二人はお互に愛し合ひたい……おや、お前は往かなくちやなら

ない。

あの従兄がまたやつて來たの。外で待つてゐるの。

お前だけが會はなくちやならないの。あの貸金をどうするといふ

のかね。

まだ賭博の負債を拂ふのがあるといふの。お前はにっこり笑つて

帳消しだといふの。

よろしい、お前の微笑で買はれよう。まだまだ賣つていい微笑が

あるといふの。

私に手があり、眼があり、心のなにかし部分が残つてゐる限り、私の作品は即ち商品だ、それでお前の微笑ほほえみがどれだけ買へるの。

私は奮發した相場を拂つてあげよう。だが今晚だけは

灰色な夕暮の残る所を坐り通して味ひたい、

お前は馬鹿げてるといふかも知れないが、

若しや私がもう一度佛蘭西へ歸つたならば、

もう一枚の繪、たつたもう一枚の繪……それは

今度はお前でない聖母の顔なのだが、私がそれをどんな風に

描けるかを

心行くばかりに考へてみたい。私はお前に私の側に坐つて貰つて、

ミケル・アンジェロがどういつて

私の仕事を批判しその價值を語るかを聞いて貰ひたい。

聞いて呉れるの。明日になればお前の友人を満足させてあげる、彼の廊下へ懸ける繪に著手して、

見る間に肖像を描きあげ……また彼が不平がましい様子であつた

なら。

ほらほら、一つや二つのはお負こがの景品をもつけてやりませう。

それでお前の從兄いとこの氣まぐれに

支拂つてやるに十分であるであらう。その外

私のいいと思ひ、私の満足に思ふことは、

お前の懸飾一かけ買ふために銀貨十三片を儲けてあげることだ

ルクレチアよ、それで満足だらうね。だがお前の從兄いとこはお前に

何をして呉れるの。

何をもつとお前を喜ばして呉れるの。

私は今晚老境にあるやうにすつかり温和になつて仕舞つた。
餘り後悔もしない、出来たことを改めようとも思はない。

過去の生活がどうして改められやうぞ。

フランシス王には悪事を働いた……信實に

私は彼の金をくすねた、その誘惑に打負かされた、

私はこの家を建てた……罪惡だつた、私はその全部を白状した。

私は父と母とを餓死させて仕舞つた。

所で私が金持になつたとする……どうして人が

財産を作るかを前前は知つてゐる。人間はだれも運任かせだ。

私の両親は貧乏に生れ、貧乏に生き、貧乏に死んだ。

だが私は兎に角私の全盛期に骨を折つた、

そしてその報償は實入りのいいものでなかつた。かりにここへ孝行

息子を連れて來たとして、

私のやうに二百枚の繪か描けるかどうか。やらして見て御覽なさい。
疑もなく神様は過不及のない報償の理を行つてお出でになる。

實際に今晚は少くもお前は私を愛して呉れた。

私はこの地上で満足しなければならぬ。が、未來はどうなる

だらう。

恐らく天國に新しいもう一つの機會がないとも限らない……

新ジエルサレム四邊の大きな四つの壁は

天人の手に持つ蘆の尺度で平等に出來あがつて居る、

それヘレオナルドとラファエルとアンジェロと私が

繪を描くんだが……私の外他の三人は

みな無妻だ。でも彼等は私に打勝つ、

それはなほも私の側にルクレチアの居る爲めだが、いやそれは私の

勝手に撰んだ所だ。

あれまた從兄いとこの口笛だ。愛人よ、早くいつておやりなさい。」

本詩はブラウニングが最も得意とした劇的獨白詩の一篇である。技巧的畫家アンドレアが高遠な精神美を缺いたが爲めに、他の畫家が「天國へいくたびも到達し、入り込み、確に天上の座席を占めてゐる」に拘らず、彼は天國に接近し得ても到底地上を離れることの出来なかつた悩みと、藝術の何物たるを理解せずに自分の美貌に感溺してゐる夫を蹂躪つた不貞の妻に彼が引摺られて行つた醜い姿とが、全篇の各行を通じて傷しくも美妙に表現されてゐる。劈頭第一に「だが喧嘩はもう止めにしよう」とあつて、不貞の妻ルクレチアが情人に貢ぐ金を得るため畫家アンドレアが繪の註文に應ずることを承諾して、彼女の機嫌を取らうとしてゐるのである。「お前の友人の友人」とは即ちルクレチアの情人の友人のことで、その情人が詩のなかで「從兄いとこ」となつてゐるが伊太利亞語の *Cousino* は情人の同意語であるさうである。詩の最後の邊になつて、アンドレアは妻に「私共二人はお互に

愛し合ひたい」といつてゐると、妻の情人は口笛を吹き家の外へ呼出しに来てゐる。アンドレアは叫ぶ、「往かなくちやならないの。あの從兄がまたやつて來たの。外で待つてゐるの。お前だけが會はなくちやならないの。あの貸金をどうするといふのかね。まだ賭博の負債を拂ふのがあるといふの。お前はにつこり笑つて帳消しだといふの。よろしい、お前の微笑で買はれませう。まだまだ賣つていい微笑があるといふの。私に手があり眼があり、心のなにかし部分が残つてゐる限り、私の作品は即ち商品だ。それでお前の微笑がどれだけ買へるの。私は奮發した相場を拂つてあげよう」彼の言葉は思ひ切つた程皮肉である、愛されずしてしかも感溺の癡情を斷然と截切ることの出来ないものの傷しい悲鳴である。最後に、「あれまた從兄の口笛だ。愛人よ、早くいつておやりなさい」の言葉で本詩が終つてゐる。私共は「餘り後悔もしない、出來たことは改めようとも思はない。過去の生活がどうして改められやうぞ」といつてゐるアンドレアの寂しい弱者の姿を見せつけられるのである。彼は如何にいらいと心のなかで動揺しても、彼に一刀兩斷の力を缺いだ。彼は醜い執著の犠牲になるより他に道がなかつたのである。

畫家アンドレア・デル・サルトオは佛蘭西王フランシス第一世に迎へられ、フォンテンブロウの宮殿で王侯貴族の生活をした。詩のなかに「この時お前が焦つたくなりさへしな

つたならば』とあるやうに、ルクレチアから早く歸國して呉れの書狀に接してそれを拒絶することが出来なかつた。彼がフロレンスへ歸つた時フランシス王は莫大な金を彼に託された。それは伊太利亞の名畫や彫刻を買入れさせる爲めであつた。然るにアンドレアは王様から預つて來た金をくすねて仕舞つた。そして不貞の妻の歡心を買はんが爲めに警澤のありたけを盡した、宏壯な家を建築した。それで本詩のなかに書いてあるやうに、『時々夜になつて、私が疲れ切つた眼を畫布から離して見上げると、部屋の壁が、煉瓦の一枚一枚がはつきり輝いて、漆喰のかはりに光る黄金……私がセメントにして仕舞つた王様の黄金となつて眼前に顯はれ、』そして彼を惱ますのであつた。なほその上、彼は兩親を餓死するままに放擲してゐる。彼は不貞の妻に金錢を湯水のやうに浪費させながら、どうして彼はかかる不孝の兒となつたか。ブラウニングはアンドレアに云はせてゐる、『かりにここへ孝行息子を連れて來るとして、私のやうに二百枚の繪が描けるかどうか、やらして見て御覽なさい。疑ひもなく神様は過不及のない報償の理を行つてお出でになる。』詰り馬鹿な息子は孝行をして自分の馬鹿を補ひ、偉い息子は親不孝でも偉いといふ事でバランスを取つてゐるといふ譯だ。アンドレアの心は非行に對する後悔と自分の不運を轉換し得ない無氣力とに亂れて麻の如しである。

ブラウニング夫妻がフロレンス滞在中、親戚筋のジョン・ケンヨンからアンドレア夫妻の肖像模寫を買つて呉れるやうにといふ依頼を受けた所、思はしい模寫が手に入らなかつたので、その繪の氣分心持を本詩で歌つてケンヨンに送つたのである。所で本詩の誘因となつた『アンドレア夫妻の肖像』なるものは、半身像であつてアンドレアは右の腕で妻を擁し顔を傾けて彼女をしみじみと見入つてゐる。そしてルクレチアは手に手紙を持つてゐるが、彼女はそれを見てゐるのでもなりましたアンドレアを眺めてもゐない。彼女は無表情な顔付きで畫布から眞直に視線を投げてゐる。その有様は憤怒を語つてゐるのでなく、云はば無言の雷といつたやうなもので、あらあらしくはないが冷い我儘ものの心持が出てゐるやうである。ブラウニングの本詩に於て、アンドレアが妻を呼んで『お月様』と云ひ、そのお月様が誰にも屬してゐるお月様だと云ひ直してゐる。そしてブラウニングが『お前がにつこり笑ふ……あはあ、そのまま私の繪だ』といつて、アンドレアとルクレチアとが窓に添つて坐つてゐる姿を歌つた時、彼は前記の『アンドレア夫妻の肖像』を心のなかに想像したのである。彼は、『灰色が流れて何もかも銀鼠に包んでゆく……薄暮の微光にすべてのものが、お前も私も包まれる、お前は私を夫として得意であつた最初の刹那の姿……（それは過ぎた昔話になつたが）……それに引きかへ、私の方は彼方のくすんだ愉快なフキ

エソーレとよく和やわらぎ合つて私の青春希望藝術を權化するすべての時間を表現してゐる」と歌つてゐる所は、多少『アンドレア夫妻の肖像』とは違つてゐるやうである。もとより本詩はブラウニングの感したアンドレアを書いたものであるが、この位印象的な強烈に取扱つた心理解剖は、いづこの詩壇にも稀れであるといつていい。如何にも本詩は讀者に傷しい哀愁をそそる傑作である。

アンドレアは千四百八十六年頃フロレンスで生れ千五百三十一年に死んでゐる。彼は仕立屋の伴であつた、そしてその後『仕立屋のアンドレア』と稱名されるに至つた。彼が本詩の妻ルクレチアに初めて會つた時、彼女は人妻であつたが、二十六歳の時彼女を迎へて妻としたのである。彼は『無缺點の畫家』とも稱名されたやうに徹頭徹尾技巧の大家であつて、ブラウニングは彼に、『けれどもお前が……その同じ完全な額と、完全な眼と、完全すぎる口元と、私の魂が鳥が鳥差とりさしの口笛を聞いておびき出されるやうに、愉快に響くお前の低い聲とにつけ加へて、お前の精神を呉れることが出来たならばと思ふのだ』と語らせてゐるが、それでも自分がラファエルやアンジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチになれないのはその本質に缺けた點があるからだと言つてゐる。ブラウニングはアンドレアに、『私の藝術はすべて銀鼠だ、溫和だ完全だ。それがいけないのだ』と叫ばせて、例によ

つて『不完全の光榮』を説いてゐる、即ち大藝術は小完全でなく、大きな不完全に閃く神の光榮でなければならぬのである。アンドレアはそれを缺いた。

軽い女

一

この邊で話が終るのだが、
三人の内だれが一番可哀相だと思ふかね……
僕の友人か、眼附の淫みだらな僕の友人の色女か、
それとも僕か。

42

二

僕の友人は既に失ふには善よすぎたが
まだまだ善くなつて來さうであつた、
その時彼女あいつが係蹄わなをもつて彼の道を遮つた、
そしてそれを彼に投げた。

43

三

僕は僕の友人が係蹄に引掛るのを見た時、
『畜生』と僕は叫んだ、『彼女あいつは九十九の獲物へ彼を加へて
丁度一百とする積りだらうが、
巫山戯るにも程がある。』

四

所で僕の友人がすつかり參つて仕舞はない前に、
彼女の自慢にするのは鷺の勝負事で、
鷓鴣などはてんで問題にしないといふことを
彼に證據立てる必要があると僕は思つたのだ。

五

それで僕は眼をお受けなさいとばかりに彼女に目配せした、
熱心振つて彼女の手を握つてやつた、
すると彼女は僕の氣性に惚れてぐるつと廻り、
實に全身を僕に提供して仕舞つた。

六

僕は名聲を世界に馳せた鷺だ、
僕の友人は小娘のやうな顔をした鷓鴣だ。
……君、そんなに顔を横むけて唇を曲げなくてもいいよ、
もう二三分間の辛抱で話が済むのだ。

七

ねえ見給へ、僕の友人は衰へて青白くなつてる、
僕がバジリスクでもあるかのやうに睨附けてる、
恐らく僕は彼の太陽の圓盤を缺いで、
彼の日中を夜にして仕舞つたらうよ。

彼は僕の行爲は泥坊だと思つた……

『よしんば僕が彼女を愛するとしても、それは彼も知つてゐる、人間は情熱を制して、特に戀の問題ではだ、友人に眞實であるべき筈だ。』

所で片方の女はと見るに……僕の掌中にあつて柔順なること、

恰も扉に日向ぼつこしてゐる梨の實の如しだ、

一寸でも指で突つきさへすれば忽ち地上に落ちた、

僕のものだ……僕がその梨を落してもいいか。

落すにしても僕に食ふ意思がない、それが困つた點だ。

それぢや路傍に捨てたらどうか、問題の解決に役に立つか。

僕が枝を曲げて梨の實を落せば、

十二疋の蟲は渴を醫することの出来る代物だ。

僕の友人が僕をどう思つてゐるかは先刻御承知の所だが、

僕が今に彼女にどう思はれて來るかも、君に想像が出来る。

次の問題は僕が自分自身にどう見えるかといふことだ……

英雄どころでないのだよ。

十二

兎に角他人の魂を遊戯するのは危険なことだ、
自分の魂を濟度するだけで手一杯だ。
だが僕の友人が石ころと間違へて
焼石を掴んでゐることを見ると黙つて居れない。

十三

由來人間は眞實に對して眞實を語るのが大好物だ、
彼女あいつはち尻の軽いといふことも事實だ。
然し彼女あいつはいふであらう、『あの青年なんて打棄つて置きなさいよ、
私があなたに何の悪いことをしまして。』

十四

僕が君に話すことの出来るのはここまでだ、
少くも僕の物語はここで停電だ。
所でロバート・ブラウニング、君は劇作家だ、
これを材料にして一つ書いてはどうだ。

肖像畫

人に依ると飲んだり食つたりする部屋に肖像畫を懸ける、妻君がその下で茶器を音させる。

從兄弟がお茶のコップを掻き廻はしながら、尋ねる、

「ねえ、繪の婦人は誰れだつたかね。」

「ジョンが賣立で買つて來た詰らないものよ」

と妻君は答へて暴風雨來といつたやうな危険な顔を向ける。」

「鼻のしたに黒い影をつけたものだね。」

嗅煙草をやたらに嗅いだ證據だらうかね……

と從兄弟はつけ加へる。夫のジョンは胼胝をふまれたやうに業を煮やす。

また場合に依ると、今度は妻君がない、

すると肖像畫が女王振を發揮して、

青年時代にかき集めた品物を

睥睨してゐる： 假面、稽古用の手袋と劍、

そして木製のパイプ、薔薇の木や櫻或は素馨で拵へたものなど、

そして長い鞭に馬車の馬を御する革紐、

石膏に取つた拳骨の模型（「残念だが僕のぢやない、

ありや僕の師匠、「チプトンの總なめ」の拳骨だ」）

そして中央の一點が射貫いてあるカルタ札、

葉巻入れに使つた縞子の女靴、

シヤブレースで射留めた羚羊の角、

そして版畫……ルエリイが駿馬クルキザーに鞭をあててる所と

『搗碎き名人』拳闘家セーヤースの圖だ、

そしてラブリーの袖珍本。

友人は両手をポケットに突込んで、

肖像につかつかと接近してそれを調査し、

そして一言述べるであらう、『ジエーン・ラムに似てゐるね、

だが眼玉が半分凹あなから飛び出てる、

光つた所は髪の毛も悪くない……

でも鼻の恰好がでこぼこで天狗鼻だ。

僕はジエーン・ラムとヅキシードで踊つたことがあつたよ、

こりやジエーンの肖像だ、でなければ誰のだね。』

僕の持つてるものは版畫だ、

銅版だ、メゾチント版だ、

そりや習作だ、空想だ、架空的産物だ、

だが實在だ……と僕は確信してゐる、

なぜならば暗示以上にある顔を

表現してゐる、僕が見たことのある女の面影を

この位に出してるのを他に見たことの無いからである、

單に銅版に過ぎない、それにしても器用な作だ。

まぜこぜになつてゐる版畫帖がある、

紙挾かみはさみに五十枚も入れてある。

僕の友人が僕の所の葡萄酒を飲んでみる、

僕等はぐるつと椅子を爐の方へ向け、
屋根裏住居すまゐの若い時代を喋り合ひ、
月給の上つた今日をくすくす笑つて話し合ふ、
そして餘裕のある生活の好結果……繪畫や詩歌、
國民肖像美術館などを語り合ふ。
その時僕は僕の寶物を出して來る。
僕等はそれを二十枚もはねる、
すると僕の友人は驚歎の讚辭を
僕のマーク・アントニオに拂ふ……
『ゆつくり見ようよ』と、彼は僕を止める。
『向うの壁に懸つてるのは何といい作だ、あれも銅版だね。』
さてはチョッキウシキの後の紐うしきをゆるめなくちやならない次第だ、

頬がほてつて赤茄子のやうになる、
僕の心臓は嬉しくて飛び上る……飛び上ると次に傷んで來る。
『ねえ、君、記念のために、
君が今褒めたボルバトウのもう一枚の方を持つて行つて呉れ給へ。』
馬鹿つたらない！ 若しや僕の友人が更に一步を進めて、
『ついぞこれまで見たことのない、
僕の呼吸いきの根を止めるやうな作だ、
青春を暗くらしてもいい顔だ、老後の欣喜よろこびに夢みていい顔だ、
死を以て争つてもいい顔だ』とでもいつたならば、いふまでもなく
僕は半ば狂喜し半ば憤怒して、
壁の銅版肖像を彼に抛り出していふかも知れない、

『こりや複製に過ぎない、別に大いした値がするのぢやない、
持つて行き給へ、僕の願ひだ。』

本詩最後の『ありや複製に過ぎない云々』は、主人が自分だけが認めてゐた肖像銅版に同感者を得たといふ歡喜から、あれは複製に過ぎないから持つて行つて呉れと自らを欺くに至るといふ特殊な心理的狂態を書いたのである。美術の蒐集家といふものは、自分の所有品を心から稱賛されると慾も得も忘れて仕舞つて有頂天になるものである。本詩の表題は『肖像畫』である、即ち肖像畫を持つてゐる三人の場合を想像して、詰り自分の場合を中心にして他の二つを左右に並べて三つの情景を獨語體に書いたものである。第一の場合には繪畫に理解のない妻と妻の従兄弟との言葉に、主人は恐ろしく不愉快を感じしめられる所である。第二の場合は未婚者の居間である。彼の屋外遊戯好きの性癖から集めたものの中に一枚の美人畫が邊りを拂つてゐる……『チプトンの總なめ』（チプトンはバミングハム附近の鑛山で、詰りチプトン出身といふ意味）と綽名された拳闘家の拳骨の模型、ピス

トル練習の爲めに用ひたカード、戀の歴史の附いてゐさうな女の縞子靴、ルエリーと呼ばれた有名な馬の訓練者や『搦碎き名人』と綽名された拳闘家を描いた版畫、それにラブレの袖珍本の中に狭まつてゐる美人の肖像である。訪問者はそれが女優ジェーン・ラムの肖像であるといふのですが、勿論間違つてゐる。彼の言葉は不注意な戲言と誇張とであつて藝術の何物たるを知らないのである。第三の場合は銅版畫蒐集家が理解のある知己を得た所を書いたもので、褒められた嬉しさの餘りボルバトウ（有名な銅版美術家、千七百三十八年——千八百〇三年）の作品を興へるに至るのである。詩中マーク・アントニオは有名な銅版家で十五世紀から十六世紀に存在した美術家である。全詩を貫く輕妙洒脫な筆致が遂に私共の悲哀を誘致するに至るといふ感がある。蓋しブラウニング作中私を最も喜ばせるもの一つである。

愛國者

一

一年前の今日この日、
到る所薔薇の花だつた、
通つた路に桃金嬢てんごうさへ矢鱈やたらに交ぜ撒らされてあつた、
お寺の尖塔は旗で炎え立つた。

58

二

空中は鐘の音でどよみ曇つた、
古い建物は叫ぶ群集で左右に揺れた。
その時私がいつたとする、『騒々しいには閉口だ……
だが天から太陽を取つて呉れないか。』
『お安い御用です、して次の御希望は』と人々は答へたであらう。

三

所で私の方が太陽に飛びついて、
それを親愛なる市民諸君に與へたのだ。

59

人間の力の限り私は何一つ成さざるはなかつた。
早や一年は立つた今日この日、
私の收穫如何は正に御覽の如しだ。

四

見渡すに家の屋根には一人もゐない、
足腰さかない二三のものが窓に坐つてゐるのみだ。
人はみな見物席の最上場所は
斬殺門だと知つてゐる、或はもつといい場所は
斷頭臺のまつしたであらう、

五

私は雨に濡れた、必要以上に
細引は後手うしろてになつた私の手首を食ひいつた、
そして感じから、私の額が出血してるのを私は知つた。
興奮してゐる人々は、
一年の非行を責めて私に石を投げた。

六

かく私は都入りをした、私は今かく都出でをする。
古來凱旋の瞬間に死んで仕舞つたものもある。



神様はさういふ男に仰しやつたであらう。『世間が支拂つた：
：私は君に借りが一文もない。』所でそれに反して神様は私
に『私が君に支拂ふものがある』と仰しやるであらう。その
方が私の好都合だ。

本詩最後の行に『私が君に支拂ふものがある』と神様が何か仰しやるであらうとあるのは、ブラウニングがアンドレア・デル・サルトオに『私は安く評價されてゐる、實際に長らくの間不遇の地に置かれてゐるといふことは、寧ろ私に取つて安全だと云へる』と云はせたのと、同じ意味である。即ち地上生活に報いられないと、天國に入つて神様から報酬が貰へるといふことである。本詩は單に古い物語を書いてあつて、それに歌つてある所謂愛國者の誰であるかは勿論明瞭でない。僅か一年前に凱旋將軍として都入りした英雄が今斷頭臺へ引かれて行くといふ物語は、歐洲の歴史には珍らしくない。本詩の詩的價值は如

何に筆少く簡單にしかも力強く印象的にその物語が表現されてあるかの點にある。第一節の『お寺の尖塔は旗で炎え立つた』とあるのは、燃えるやうな歡迎の旗が高いお寺を飾つたことで、第二節の『空中は鐘の音でどよみ曇つた』とあるのは、鐘の音ががんと響いて天も曇つたかと思へ感じられたといふのである。この時凱旋の將軍の希望なら民衆は如何なることでも、その意に背かなかつた。然るに彼は『太陽を取つて呉れ』と要求せず、自分で太陽を取つて民衆に與へた。そしてかかる献身的行爲をしたに拘らず、その計畫が誤つたといふので、彼は朝の露と消えるべく斷頭臺へ引かれて行くのである。

◎ ポルフキリアの愛人

今宵雨は早くから降り始めた、
忽ちに陰鬱な風は目覺め、
悪意で楡の木为天邊を傷づけ、
最悪を盡して湖水を惱ました、
私は破れんばかりの心でそれに耳を敬てた。
その時ポルフキリアは入り來り、寒さと嵐を締出して仕舞つた、
跪いて不景氣な爐をかき起し、
小屋中を温かくした。

そして後立ちあがり、彼女は
水の滴たる上着と肩掛とを取り、
汚れた手袋を側に置き、縛つてあつた帽子を
解きほどこき、濡れた髪の毛の垂れるに任した。
そして最後に彼女は私の側に坐つた、
私を呼んだ。答なきを知つた時
彼女は私の腕を腰の廻りに引きよせた、
今滑かな白い肩を露にし、
黄色の髪をすべてかき亂し、
腰を踏めて、彼女は私の頬を抱き、
黄色の髪でそれを蔽ひ、
如何に彼女が私を愛するかを耳語した……
彼女は餘りに弱くて全身の努力に拘らず、

苦闘の感情を驕慢から自由にし、
空虚な束縛を断ち切り、
永久に自らを私に與へることが出来なかつた。
然し感情も時には力を得、
今宵の如き賑やかな酒宴も、
彼女を抑制して、戀のためしかもそれが無益なるが故に
孤影悄然たるものを思ふの情を禁じさせることが出来なかつた。
さればこそ彼女は風雨を冒かして來たのであつた。
いふまでもなく私は
幸な高慢な彼女の眼を見あげた、今こそ私は
彼女が私を崇拜するのを知つた、私の心は驚き、
激動し、なほも激動するのを感じた時
何を私が爲すべきかを心に尋ねた。

この瞬間に彼女は美はしい純白至善な
私の所有物であつた……私は私の爲すべきことを見出した、
私は彼女の髪の手すべてを
一本の長い黄色の太い紐にして、
三度それを彼女の小さい喉に巻きつけ、
彼女を絞め殺した。彼女は何の苦痛も感じなかつた、
確に彼女は何の苦痛も感じなかつた。
恰も蜂を握つて花瓣を閉ぢた花に於けるやうに、
私はそつと彼女の臉を開けた……
彼女の青い眼が張りつめずに笑つてゐるのを見た。
私は次に彼女の髪の手を首の廻りに
解きほどこいた、彼女の頬は再び
私の熱い接吻のため紅に燃えた、

私は以前のやうに彼女の頭につつかひ棒をしたが、
今度は私の肩が彼女を支へた……彼女の頭は静かにそれへ垂れた。
この微笑む薔薇色の小さい頭は
最後の意思を貫いて、
輕蔑したものの凡てを離れ、
その代りに私を得たのを喜んだ。
彼女は神様が果してその懐しい一つの希望の戀を
許し給ふや否やを知らない……かくて私共は
今體を一つにして坐つた、
長い終夜身動きもしなかつた、
そして神様は咎めの一言も發し給はなかつた。

ブラウニングは命令していふ、『決定せよ、直に動け。』この積極的態度がその作品に
極端なシチュエーションと豊富濃厚な詩的色彩とを與へてゐる。彼は人間行爲が男性的に
直截簡明自らを偽らないものであれば、神様は喜んでお許しになるといふことを力説して
ゐる。本詩も正にそれを説明したもので、ポルフェリアは愛人のために絞殺された。そして
彼女を殺した男と殺された女とが、體を一つに結んで終夜身動きもせずに坐つてゐたが、
『神様は咎めの一言も發し給はなかつた』とブラウニングは最後の一斷案を下してゐる。
ポルフェリアが愛人に絞殺された時、殺人者は狂人であつたのであらうか。然し本詩を
讀むと彼の行爲に相當のメソッドがあるやうに感じられる。ポルフェリアは社會上の地位
が高かつたが爲め自然に態度の硬化したやうな點があつて、彼女は愛人を喜ばせる特殊の
表情をすることが出来なかつた。然るに一夜晚餐が終つて舞踊が始つた時、彼女は急激に
戀の熱情が燃え上つて來るのを感じた。それで彼女は突然に愛人を見窄らしい小屋に訪れ
たのである……かういふ心理はよく氣まぐれた婦人に動くものである。彼女は目眩い食堂
の光や集つた人々の騒々しい歡聲を後にして、彼女のことばかり寂しく考へ込んでゐる愛
人を訪れた。降る陰鬱な雨は大地をたたいた。彼女は女神のやうに愛人の家を訪づれる

と、爐には火が消えてゐた。彼女は今高い社會的地位のことなどを忘れて自ら火を作つた。その時愛人の心は彼女の親切な行爲で炎え上つたであらう。即ち彼女は『寒さと嵐を部屋の外へ縮出して仕舞つた』のである。彼女は彼の側に寄りその腕を彼の腰に廻らし、髪の毛をとりて彼の顔にふり被らせそして熱心こめて彼を接吻した。この瞬間に彼の心を貫いて閃めいた考へは即ち彼女を殺して仕舞ふといふことであつた。如何となれば彼女を永久に所有してかういふ不思議な嬉しい瞬間を永續させるには他の方法がなかつたからである。ポルフェリアは今愛人のなすがままになつてゐる。恐らく彼女は天國に入るにしてもそれ以上の姿を與へられなかつたであらう。彼女は自分を煩はしてゐた社會的地位を捨て、今漸くにして眞實の愛を見出した。そしてかく彼女が自分に打ち勝つことの出來た時、彼女は實に天女のやうに美はしかつた。彼女の愛人は彼女をそのほぐした長い黄色の髪の毛で絞殺して仕舞つた。本詩もブラウニングの得意とする獨白詩の一つで、彼は眞實な愛の爲めならば、殺人必ずしも意に介する必要がないといふ點を仄めかしてゐる。

實驗室

—

あなたの硝子のマスクをしつかり嵌めて、
幽かな白い煙が上つてゆくの見詰めてゐると、
あなたはこの悪魔の鍛冶場で仕事を勉強して下さる……
どれが彼女^{あいつ}を毒殺する毒藥で御座いませうか。

二

あの人は彼女と一緒にゐる、二人のものはどこで何をしてゐるといふことを

私が知つてゐるのを知つてゐる。彼等が私を笑つてゐる時、私が一人もゐない寂しいお寺へ逃げこんで、神様に祈つてゐると信じてゐる……所が私はここへ來てゐる。

三

煉藥をよく碾いて、濡らして捏ねて下さり、粉を十分に搗いて下さい……少しも急ぎません。王様の御殿へ出掛けて舞踏するよりか

72

ここにお邪魔をしてあなたの不思議な品物を見てゐたいので御座います。

73

四

藥研に入れてあるもの……あれは護謨で御座いますか。こんな金色の液を滴らすなんて偉い木ですわね。彼方にある柔かい色の硝子罎、まあ見事な緑色こと、嘗めると甘いに相違ありません……あれも毒藥でせうか。

五

すべてこれ等の寶物を與へられたならば

何といふ目に見えない猛烈な欣喜よろこびの群りでせう。
耳輪のなかや手箱の内に、印形や
扇子の金具や金銀細工の籠のなかに純白な死を忍ばせるなんて。

六

王様の御殿でほんの丸薬を少量與へると、
ポウリンは三十分間とは生きてゐますまい。
煉劑を飲まされると、エリスは頭や胸や
腕や手もろ共にぱたと死んで斃れませう。

七

もう出来上りましたの……色が怖ろし過ぎますわね。
向ふの硝子罐のやうに柔かな曇つた誘惑的な色にして下さらなくて。
考へてどうしようといふ隙ひまを與へずに、
飲料水にほり込んで、かき廻はして、ぐつと飲ましてやりたいもの
ですわね。

八

何といふ粒ですか。相手の女は私のやうに小さいお小間使ぢやない
のですよ……
その點で彼女おんながあの人を係蹄けいひにかけたのです。これぢや

到底彼女の男のやうな眼をつぶらせ、
壯大な脈搏に『止め』をさすことが出来さうに御座いません。

九

昨晚のこと、彼等兩人が何か囁き合つてゐました時、
私は彼女をぢつと見詰めまして、かうして三十分もしてゐたならば、
縮こまつて斃れるだらうと思ひましたが、
どうして斃れる所か……だが、この毒薬がそれをさせます。

一〇

苦痛の少いやうにとお願ひしたのぢやありませんわ、

死をずんと感じてその證據の残るやうにして下さい、
焼判を捺して、火で焼いて、美貌を滅茶滅茶にして、
彼にその死相を記憶するやうにして下さいましな。

一一

出来ましたか。マスクを取つて下さい。ぢかに握つてよく拜見
したい……
人殺しの手傳をしたことを後悔なすつてはいけません。
綺麗な丸薬に對するお禮、私の全財産ですよ……
相手を斃すとしまして、矢張私もこれで斃れることが出来る
でせうね。

さあ、寶石の全部をお取り下さい、御満足だけ黄金を飲みほして

下さい。

御希望であれば、私の口を接吻してもよう御座います。

だが私の着物を拂つて下さい、さもないと知らぬ間に着物の芥こみが恐怖を脊負つて行くかも知れません……直ぐ御殿で私は踊ります。

本詩はブラウニングの獨白詩の性質を帯びたものだが、オックスフォード版には抒情詩のなかに入つてゐる。女の嫉妬を心理的に取扱つたものとして有名な一篇である。ブラウニングは嫉妬も徹底的であれば神様は決斷と實行をよみし給ふといふ點から見ても是認すべきものだとしてゐる。今美はしい一婦人は嫉妬に驅られて敵の女を倒さんが爲め、毒藥を調

合して貰ふ爲め老科學者を實驗室に訪づれてゐる。老科學者は科學の効果といふ事にのみ熱中して、科學的な仕事を唯一の生命としてゐる。これ等の違つた對照が極めて印象的である……一は目的のみ考へ他は仕事そのものに興味を中心を置いてゐる。時は中世紀のことで殺人そのことが藝術でさへあると想像された時代である。女は戀の敵を倒し、しかもその死相を出来るだけ醜惡にして自分の夫が永久に記憶するやうにと希望してゐる。故に彼女はどこまでも毒藥を効力のあるやうに調べて下さいと科學者に要求せねばならぬ。この女は輝くやうな美人で、自分が美人であるといふ自信がかういふ過激手段を取つて差支ないやうに思はせてゐると想像していいであらう。彼女はこの實驗室で、敵が毒藥を含まされて床上に四つんばいに倒れ、顔に醜い墨のやうな斑點がつき、その口から汚い泡を吹くであらうといふ様子を想像して微笑んでゐる。彼女はいふ、『相手の女は私のやうな小さいお小間使ぢやないのですよ……その點で彼女あいつがあの人を係蹄にかけたのです。』……これ即ち男といふものは女の肉に誘惑されることを赤裸々に語つた言葉である。もとよりこの實驗室に入つて毒藥調合を依頼してゐる女は、戀の敵さへ殺して仕舞へば自分でも生きてゐようとは思はない……『相手を斃すとして、矢張私もこれで斃れることが出来るでせうね』の言葉となり、『さあ、寶石の全部をお取り下さい、御満足だけ黄金を

飲みほして下さい。御希望であれば、私の口を接吻してもよう御座います』とあるからには、自分の生命は到底無いものと覺悟してゐることが明瞭である。彼女には普通の女らしい謙讓は失はれてない。彼女の自制心は無くなつて仕舞つた……それが何だ。然し彼女は男の方を全然恨まない。敵愾心は専ら戀の敵だけに注がれてゐる。この點を注意しなければならぬ。

僕の前公爵夫人

壁に掛つてゐるあれは前公爵夫人で、
まるで生きてゐるやうな肖像畫だ、僕は
驚異の作品だと思つてる。畫僧バンドルフが
一日に描きあげた勞作で、君の御覽の通りだ。
どうかち坐りなすつて御覽下さい。私は特に
これが僧侶の作だと申上げる、なぜだといふに、
君のやうな縁もゆかりもない人々はこの畫像に
潜んでゐる熱心な容貌の深さと情熱を讀むことが出来ない、
それで僕を顧みて（僕の外だれも

畫像の幕を開くことが出来ないことになつてゐる、
人に依ると大膽にも僕に

どうしてかういふ容貌が描けたかを

僕に尋ねたからである。であるから君が

その疑問を持たれたとしても何の不思議でない。

公爵夫人の頬にさつといつても喜悅の紅くれないなほがさしたが、

夫の面前に於てのみでなかつた。恐らく

フラ・バンドルフが云つたであらう、『奥さん、あなたのお袖が

垂れすぎて折角の手頸が見えませんが、或は『あなたのお首に

消えて行く

幽かな赤味は到底繪の具などの

傳へ得る所で御座いませぬ』……こんな月並の言葉は

お世辭だといふことを知つてゐたが、それでも彼女には

喜悅の紅くれないなほを呼ぶに十分な理由であつた。何といつていいか知れ

ないが、

公爵夫人の心はすぐ喜び過ぎた、

餘り輕率に感激し過ぎた、彼女は

悉く見る所のものを喜んだ、いづれへもその視線を動かした。

ねえ君、詰り凡てを一視同仁に見たのだ。彼女の胸にかけた僕の

贈物も、

西方に落ちる夕日の光も、

おせつかいな道化者が果實園で彼女に

折つて差しだす櫻の一枝も、乃至は

彼女が高臺を乗り廻す白い馬でも、悉くその何れでも

一樣に彼女に愛相のいい言葉を語らせた、少くも顔を赤らめさせた。

彼女は感謝した……それは結構に相違ないが、

彼女の感謝工合だが……何といつていいか知れないが……恰も九百年來由緒正しい名前を貰つたことと

何でもない人間の贈物とを一緒くちやにしたやうな調子であつた。誰が身を屈してそんな詰らないことを非難出來よう。僕には

持合せがないが、

假りに君に爽かな辯舌があるとして、かかる人間に對し

君の意思を明瞭ならしめる積りでいふ、『あなたのこの事や

あの事が私の氣に入らない、あなたはこの點を逸してゐる、

あの點を出しやばり過ぎてゐる』……所で彼女が

君に服従する、或は明白に

君に反對しない迄も何とか逃げ口上を作るとすると……

それでも身を屈したことになる、僕は斷然として

身を屈しなかつた。もとより僕が公爵夫人を通り過ぎる時、

いつでも彼女は私に微笑んだ、だが、誰が彼女から

その微笑を受けなかつたか。事が段々と昂じた、僕は命令一下を

命じた。

彼女の微笑はぱつたり止つた。御覽のやうに

今彼女は生氣ある一枚の畫像となつたのだ。どうかお立ち下さい、

して階下の御連中に會ひませう。前申上げた如く

君の御主人伯爵様の寛裕なるは天下の遍く知る所で、

そのこと自身が持參金に對する僕の正當な要求に

御違背なきを證明してゐる。最初僕が誓言したやうに

美はしい姫君自身が僕の目的であるのはいふまでもない。

いや、御一緒に階下へ参りませう。海神の銅像を一寸御覽下さい、

海馬を馴らしてゐる所なのです。珍品と知られてゐるが、

インスプラックのクラウスが僕のために青銅に鑄つたものです。

本詩は伊太利亞中世紀の一貴族の性格描寫である。彼の名はフェララ公とあるが實際の名前ではあるまい。また詩中の畫僧フラパンドルフも、また詩の最後にあるインスブラックのクラウスといふ彫刻家も全然虚構であらう。所で詩の場面は、公爵が新しい夫人を迎へるため仲人と談話するためそれを階上へ迎へ、そこに懸けてある先夫人の肖像を見せてある所である。簡單にいふと、公爵は先夫人が自分の意に満たなかつたので命令一下眞二つにして仕舞つたことを書いたものであるが、詩の表面はなかなか複雑で心理的興味の深いものがある。公爵は先夫人を悪しざまに語つて却て自分の醜い性格を暴露するといふ破目になつてゐるが、筆者ブラウニングは公爵に同情を寄せてゐるやうな書きぶりである。公爵は先夫人がいちやつき易い性質の女で、その心の持ち合が餘りに平民的であつた。従つて自分だけに捧ぐべき管の愛を他人にまで分配するに至つた……公爵はそれが不愉快でならなかつた。畫僧が先夫人の繪を描いた時、『奥さん、あなたのお袖が、垂れすぎて折角の手頸が見えません。』『あなたのお首に消えて行く幽かな赤味は到底繪の具などの傳へ得る所で御座いません』とか、一時的追従に對しても彼女は顔を蔽らめた。それから

彼女は『西方に落ちたる夕日の光、』或は『おせつかいな道化者が果實園で折つて差しだす櫻の一枝、』或はまた彼女が乗り廻した白い馬に對しても、彼女が九百年來由緒正しい糸圖を貰つたといふことと同様に見てゐたのである。それで彼は言葉で彼女にかれこれ語つてその反省を求めなかつた。彼は『命令一下を命じた、彼女の微笑はばつたり止つた、御覽のやうに今彼女は生氣ある一枚の畫像となつたのだ』といふのである……彼女の微笑はばつたり止つたといふ一句、如何にも簡潔の妙を極めてゐる。本詩の表現の面白味は實に盡きる所がない。所で私共の同情は公爵の先夫人にあるのはいふまでもないが、ブラウニングは公爵の『決斷と實行』とに對して敬意を拂つてゐるやうである。私共はこれに對して彼を非難することが出来ない。ブラウニングは神様の面前に立つて『われこれを斷行する』と宣言し得る人間の友である。彼は恥辱に生きるより寧ろ死を撰び、自分に服従しないやうな女なら一刀兩斷して仕舞ふやうな人間を禮讚してゐる。そこが即ち彼が力の禮讚者たる所以である。

佛陣營の一挿話

一

御承知の如くわれわれ佛蘭西人はルエスボンを攻撃した。

その總攻撃の日、

一哩ばかり離れて

小山の上にナポレオンは立つた。

前へつき出したその首、その様子は君に想像される、

兩股を開いて、兩手を後に結んで、

恰も惱ましさうなごんだ額と頭腦とを平均させてるやうに。

二

丁度恐らく彼が、『天に昇るわが計畫は

地上に落ちるやも計り難し、願はくばもう一度

陸將レンズに彼方の城壁を

動かさせたい』と心に思つた時、

砲煙の間から一人の騎者が飛び出た、

跳はびはね、

疾驅一番、小山へ達するまで

その手綱を引締めなかつた。

その時微笑み喜び、

馬の鬣を掴んで馬上に直立したが、
見ると一少年であつた。

誰一人氣がつかなかつた……

(彼は唇をしかと一の字に結び、

一滴の血さへ流れ出てゐなかつた)

二度目に彼を見て始めて、彼が胸を

まづ二つに打たれてゐるのを知つた。

彼は叫んだ、『陛下、神恵に依りまして、

ルエスボンが手に入りました。

大將は早や町の廣場に居ります、

陛下は今にも軍旗の鷲が

羽搏くの御覽になりませう、

私はそれを彼方にとまらして來ました、

これ以上の喜びはありません。』首將の眼は輝いた、

彼の計畫は再び天へ昇つた。

首將の眼は輝いた、が、間もなく

それが自づと和らいだ、なほ息苦しい

出血した仔鷺を見た時、

親鷺の眼に霞の膜がかかるやうに。

『お前は負傷してるな。』『いゝえ。』……

軍人の誇りが骨身に觸れた、彼は答へた、

『私は殺されてゐます、陛下。』彼は笑ひながら

首將の側にばかりと倒れて仕舞つた。

懺悔

(西班牙)

—

嘘だ、坊さんでも、法主様でも、

お聖人様でも……その恐れられ御希望なさるすべてのものが、

悉く嘘だ嘘だ……ほら、戸のなかにも、

天井にも、ほら、壁にも床にも、

ほらほら、嘘が一杯だ……それにも拘らず、

私は次の世界へ著くまで投げとばされなくてはならないでせうか。

二

あなた方は坊さんが正しい清い人とお考へでせう。
私がこの狭い部屋へはふり込まれる前までは、
あなたのやうに肉と血との
人間でした、
あなたのお庭に咲いてゐる百合のやうに、
美の誇りに高笑ひした少女でした。

三

私に戀人がありました……申すも恥かしい次第ですが、
この怖ろしい窶やつれたやくざな體が、

最も正しい唇の接吻キッスを受けて燃えました、
戀はいつもその胸の色を變へて仕舞ひます……
ある晩戀人は私の心を接吻キッスして
燃ゆる狭霧と上らせました。

四

所が翌日、いつもの日常生活が
私の意識を再び甦よみがへらせました時、
私は『ああ罪を犯した』と叫びました。私は靜かに
下を向いてお寺へ參りまして、
懺悔堂の椅子へ進み、
そこでものやさしい老僧侶に白狀致しました。

五

だが私はベルトンの名前を口籠くちかごりました。
坊さんは仰しやいました、『はあさうか、それは非難すべき罪惡だ、
でもぼんやり悲んでも何にもならない、
氣落ちしてちやいかん。勇氣を振ひ起すことだ。
私がお前の戀を合法な
殆ど清い戀にして上げよう。』

六

お前のいふベルトンは年が若い、

邪道に入つた青年だ、人の説に依ると、
お寺や國家の法律を一變する計畫をしてゐるさうだ。
それでお前の掌中に天女の運命が握られてゐる、
雷の轟く以前にその雲を散らし、
彼の魂を救ふことがお前に出来る。

七

彼がお前の胸に横はる時、
彼に迫つて彼の計畫の全部を語らせて、
翌日私の所へそつとお出なさい、
そして彼の計畫をみんな私にお話なさい。
すると私や他の僧侶が彼の罪を清めるために、

斷食の行をして鞭で罰してあげる。』

八

坊さんの髭は白く長く御座いました、
その額は愛と眞實で輝いてるやうでした。
私はすつかり欣喜の火を浴びて家へ歸り、
その晩私は戀人に、戀人らしく心を打開けて、
愛の證據になるやうなことを話して呉れと迫りました。

九

戀人は天を憧憬れ地獄を恐れても、

99

他人に口外しないことを私に語りました。
私は横はり乍ら耳を敬て得意の情を感じました。
翌朝日出の頃、戀人が私の側を離れるや否や、
私はお寺へ足早に急いだ、
そして彼の悪意の魂を助けようと思いました。

一〇

私は坊さんに彼の計畫すべて、
たれだれがその仲間で、彼の夢みてゐるのは何だといふことを語り
ました。
そして私は叫びました、『さあ早くお祈りして下さい、
彼の魂の汚點を洗つて下さい。』

98

今晚彼はやつて來ますが、違つた變装をして來るでせう。』
夜になつても彼は來ませんでした。

一

その翌晩も來ませんでした。私はそのまた翌朝になつて
新しい勇氣を振ひ起して出掛けましたが、
お寺はがらんどでした。何だか氣になつたものですから、
私は町の方へと歩き、到頭廣場へ來て仕舞ひました、
すると、御覽なさい、高い所に坊さんの顔が現れました。

一

ああ、用意された恐ろしい斷頭臺、
鎚止めにしてある切り石……神様よ、もう他のものは隠して
下さる。

後へ草紐で結へられた頭、目隠しの布片、
縛られた手に裸かにされた胸、
その側に忙しさうに構へた首斬り人……
首をいぢくり愛撫したそれ等二つの腕。

一

私は人々が希望し恐れる何物をも分たない、

三

彼等と天を共にしない、地獄を共にしない、またここで
地上も共にしない、私の體を押し込めてゐる
この穴の部屋位の狭い場所でも共にしない、
然し私は神様や人間へ聲かぎり叫ぶであります、
『嘘だ、嘘だ嘘だ、彼等は嘘つきだ。』

失はれた指揮官

ほんの一握ひとつかみの金かねのために、
ほんの上着にくつつ附けるリボンのために私共を捨てた……
彼は運命が私共に奪つた一贈品を見出したが爲め、
私共が獻身奉仕する他のすべてを失つて仕舞つた。
人に與へる黄金の多くを持つた奴等やつらは彼に金を與へはしたが、
澤山金かねのあるものに限つて與へるにけちけちする。

それに反し、如何に私共は財布を空しうして彼に盡したか。

よしや檻ぼろでも王者の紫色でさへあれば、彼を喜ばせるに足りた。

私共は彼を愛した、彼に従つた彼を崇拜した。

彼の柔和な壯麗な眼を見上げて生きた、

彼の偉大な言葉を習つた、彼の明瞭な語調を捕へた、

彼を私共の模範として生死を計らうとした。

シエクスピーアは私共のもの、ミルトンも私共のもの、

バーンズもシェリーも私共の友であつた：：彼等は墓場から私共を

見守つてゐる。

然るに彼だけは前衛から離れ、自由民を見捨て、

遂に後陣に退き奴隷状態に沈んで仕舞つた。

私共は益々前進するであらう、が、彼の眼前に於てでない、

歌は私共を鼓舞するであらう、が、彼の豎琴に依つてでない。

仕事が行されるであらう：：然るに彼は偷安を誇り、

私共が立てよと命ずるものを跪けと反対する。

彼の名前を抹殺して仕舞へ、ここにもう一つ失はれた魂のあるのを

記録せよ：：

成すのを拒絶したもう一つの仕事、歩くのを肯ぜざるもう一つの

道路、

もう一つ悪鬼の勝利、もう一つ天女の悲哀かなしみ、

人間に對するもう一つの悪事、もう一つ神への侮辱。

人生の夜は始まる：：彼をして再び私共に歸らしめるな。

私共は疑惑、躊躇や苦痛を感ずるであらう、
彼を無理に賞讃するとなると、それは薄暮の微光を語るやうなものだ、
私共の信賴する喜ばしい曙光は再び來らない。
私共は彼に教へる、立つて戦つた方がいい……勇敢に撃て、
私共を威嚇せよ、しからざれば私共は彼を征服して見せる。
彼がかく争闘の新知識を得て死んだならば、
必ずや天國に於て許され、神様の御座近く私共を迎へるであらう。

諸君は恐らくブラウニングの肖像を見られたであらう。現に本譯詩集に彼の肖像が入つてゐる。肩巾の廣い所謂肩肥りした體格で如何にも男子らしい容貌風采の人である。彼は詩人といふよりは寧ろ銀行家或は政治家に相應しい型の人である。一言でいふと彼は健康そのものである。然して私共は彼から何を學び、如何なる點に直接交渉を持つであらうか。

しかして彼の最も傑出した特質は、いふまでもなく彼が人間生活に離れることの出來ない闘争を恐れなかつた點にあらねばならない。如何となれば争闘に依つて私共人間生活が豊富を増し、生甲斐あるものになるからである。彼にも一面東洋人のやうな静寂味を愛したといふ點が缺けてゐたのではなかつたが、彼はいつも人間の實生活へ歸り、その騒擾困難、工場活動或は社會組織に顯はれる人間的興味を中心としたる詩人であるといつて差支がない。人間世界の争闘は必ずしも無意味のものでなく、勿論宇宙を支配する原始的大法則に依つて動かされてゐる。即ち善と惡との大きな大法律に従つてゐる、そしてその争闘たるや必ずや善は遂に惡に打勝つといふ結果になつてゐる。彼はすべての争闘、すべての計畫、すべての勝利と失敗、すべての罪惡と恥辱などを一つの坵場に譬へて、その中で人間の性質が焼かれ蒸されて漸次に完成の域に達するものと信じてゐたのである。故にこの争闘を迴避して絶對的な行爲を恐れるものを『失はれた人間』だとしたのである。彼は人間はどこまでも『競争場裡に立つた勇敢な戰士』といふ態度で人生に直面せよと説いてゐる。

そして彼のかかる態度は、その根元を掘つて見ると彼の宇宙的同情に基源してゐる。人間は理解と同情の眼で見ると、すべての宇宙現象が私共に生氣潑刺な興味を與へる。ブラ

ウニングが世界最大の樂天詩人である所以は正にそこにある。昔基督が弟子を連れて町を歩き、途中に死んだ一匹の犬の横はつてゐるのを見た。弟子共は『お臭い、お臭い、お臭い』とか何とか叫んで犬をよけて通らうとした。基督は『何といふ綺麗な白い齒だらう』といつて死んだ犬を見詰めた。人に理解と同情がないと山獄は笑はない、草花も最善の美を見せない、大事な香氣を放散して呉れない。私共の樂天主義は基督の持つたやうな理解と同情を中心思想としなければ駄目だ。ブラウニングは人に、『私は君よりもつと神聖だ、もつと氣高いもつと至純だ』とは云はなかつた。彼は毎日より高い精神状態に進みつつある旅程の一人間であると信じた。彼は基督を手本にして私共の罪惡や恥辱を嚴正に批判したが、その態度は同情を注ぎ善意を傾けたものであつた。彼は所謂正義の士であつた。彼は人間本來の絶對價值を尊重した時、人間がすべての後天的附屬物を洗滌して赤裸の状態に立つた場合を心に描いた。彼は妥協や一時的計畫に何の價值のないことを信じた。彼は人間を愛した。彼等を信じた。そして彼等の友人を以て自任した。それで本詩『失はれた指揮官』のなかの句、即ち、『シエクスピリアは私共のもの、ミルトンも私共のもの、バインズもシエリーも私共の友であつた……彼等は墓場から私共を見守つてゐる』とあつたのである。實に沙翁やミルトンは民衆詩人であつた。そしてバインズとシエリーは私共の

友人として詩を作つた。

本詩『失はれた指揮官』は詩人ウオヅウオスの變節を攻撃したものであると云はれてゐる。即ちウオヅウオスが『一擲の金のため』『ほんの上着にくつ附けるリボンのために』自由思想を保守主義に乗りかへたといふのである。彼がどんな襤褸よろでも王者の紫色でさへあれば喜んだといふのである。彼が争闘の前衛から離れ自由民衆を見捨てて、遂に後陣に落ち奴隸状態に沈んだといふのである。

ブラウニングは生前しばしば本詩が果してウオヅウオスをモデルとして出来たものかどうかと質問されて閉口したさうである。彼の書簡二通に本詩に觸れたものがあつて、實際彼はウオヅウオスを胸中に描いてそれに想像を附加したものと告白してゐる。ブラウニングは叫んでいふ、『彼の名前を抹殺して仕舞へ、ここにもう一つ失はれた魂のあるのを記録せよ……成すのを拒絶したもう一つの仕事、歩くのを肯ぜざるもう一つの道路、もう一つ惡鬼の勝利、もう一つ天女の悲哀、人間に對するもう一つの惡事、もう一つ神への侮辱。人生の夜は始まる……彼をして再び私共に歸らしめるな。』ああ、何ぞ峻烈な筆誅ぞや。恐らくこれ以上嚴しい攻撃の文字はいづこにも發見せられないであらう。然しそれでも筆者ブラウニングは長者に對する敬意を失つてゐない。最後の句即ち『彼がかく争闘

の新知識を得て死んだならば、必ずや天國に於て許され、神様の御座近く私共を迎へるであらう』とあるのは、變節者ではあつても天國へ昇つて神様から許された場合に、彼は尊敬を以て取扱はれ、その御座近くに座席を與へられてゐるといふのである。

海外より故郷を偲ぶ

時は今、陽春四月、
ああ、英國にありたけれ、
朝彼の地に目覚めるもの、
思はざるに見るなるべし……
低い枝も楡の根元に

群る若枝もみな若葉して、
鶉ひわは果實園の小枝にうた唄ふ、
今英國にありたけれ。

二

四月の過ぎて五月に入れば
すべての燕のどしろまた「喉白」も巢作り始む。
垣根に花咲く梨の木は
畑はたけに垂れ、露もろ共に花瓣はなびらを
苜蓿うまじやしの上に撒き散らす…聴けや、
曲がれる小枝の端に止りて、
ありや賢つぐみき鶉ひわなりけり、彼は歌を二度繰りかへす、

そは彼が最初氣輕に自由に歌ひし興を
再びし得ずと人の疑ふを恐るればなり。
見渡す野原白露に暴く見ゆれど
正午間近くなりて賑しくなるに至らん、
子供等の集める黄金こがねてふ毛茸うまのあし新しく花開きて、
ここに見る派手な瓜の花より遙に見事なればなり。

本詩は千八百四十四年ブラウニングが妹を同伴して二度目に伊太利亞に渡航した際に出
來たもので、彼の三十二歳の作である。望郷の詩天下に多しと雖も本詩の如きは最も優秀
なるもの一つである。第一節に「榆の根元に群る若枝もみな若葉して」とあるが、英國で
は大きな榆の木が根元から澤山の若枝を簇出してゐるからである。それは氣候の關係から
落葉樹が根元から若い枝を吹いてゐるので、日本とは違つてゐる。第二節の「喉白」とあ

るのは私自身が勝手に作つた鳥の名で、『頬白』といふ鳥があるから『喉白』があつてもよござうなものだと思つたからである。ブラウニングの原詩にはホワイト・スロートとあつて夜鷺の類、喉の白いのを除くと他の部分は灰色である鳥のことである。鵜つぐみは同じ歌を二度繰返へす鳥であるから、『彼が最初氣輕に自由に歌ひし興を再びし得ずと人の疑ふを恐るればなり』といつたのは一寸ひねつた著想である。

海上より故郷を偲ぶ

北西の方セント・ダキンセントは消えゆく、その様で氣高し、
夕日は一面に血の如き赤光を流してカデイス灣に燻れり、
燃ゆる水中に青く、トラファルガーは面を顯はして横はれり、
北東遠く幽かなる所、ジブラルター聳り立つ、壯大にして灰色なり。
「ここぞ英國の我等を助けたる所なり、如何にしてわれ英國を
助けん。」

ああ、誰か我のごとく今宵神を稱へ祈禱を捧げざるものあらんや。
遙に見る木星彼方の天に上り、無言にして亞弗利加を見下せり。

製作年代からいふと本詩の方が前出『海外より故郷を偲ぶ』より六年前に出来てゐる。即ちブラウニングが千八百三十八年に最初の伊太利亜渡航に作つたものである。彼はこの時ビスケー湾の暴浪に苦しめられジブラルター通過の際など半病人になつてその名所古跡を瞥見したといふことである。彼は詩中に、『ここぞ英國の我等を助けたる所なり、如何にしてわれ英國を助けん』と海國男子報國の丹心燃ゆるが如きものあるのを示してゐる。セント・ヴェンセントは西班牙西南端にあるネルソン大提督の古跡。カディス灣は西佛聯合艦隊が編成された所。トラファルガーはカディスとジブラルターとの中間に僅か突出してゐる岬、ネルソンが西佛聯合艦隊を破つた歴史上著名な場所。ジブラルターは西班牙南端にある高さ千三百呎長さ三哩の巨岩に作られた要塞。

夜の媾曳

海は灰色なり陸は長く黒し、
黄色の半月大きく低くかかる、
小さい喫驚せる波 眠を破り、
飛んで勇ましき渦を作る。
今舳先を進めて入江にのしかかり、
速力を止めて軟泥の砂に入る。

温かき海の香する海岸一哩と續き、
三つの野原を横断すれば農家顯はる…
窓硝子に與へる一輕打、マツチを急に鋭く燧る音、
それに續いて青光りする燐火。
歡喜と恐怖に満ち、互に交はす言葉ぞ
互に觸るる二つの動悸よりも遙に低し。

朝の別れ

突如として海岬に迫り、
太陽山の背を照らせり。
彼の往く金色の一路一文字に渡り、
男の世 男なくして如何ぞわれ生き得んや。

前詩『夜の嬉曳』は男の戀の逢瀬を語り、本詩は翌朝太陽を受けて別れ行く男を海邊へ見送つた女の感情を描いたものであらう。解釋者に依ると本詩三行目『彼の往く金色の一路』とある『彼の』を前行の太陽のことであるとして、前詩『夜の嬉曳』同様に等しく男の詞とするのもある。また兩詩共、戀の嬉曳でなくて終日外で働く夫が歸家した場面と翌朝また勞働に出掛ける所を扱つたものであるとする解釋者もある。もとよりこの二篇の本當の意味は作者だけが知る所であるが、私自身は『夜の嬉曳』を男の方『朝の別れ』を女の方と見て、兩篇共戀の感情を描いたものとして味ひたい。兩作品とも言葉短くして意味の深い名篇たるを失はない。『夜の嬉曳』に於ける『窓硝子に與へる一輕打、マッチを急に鋭く燐る音、それに續いて青光りする燐光』……ああ述べ得て妙。

人生に求むる愛

一
一 部屋 一 部屋、

われ等の共に住む

家中をわれ求むるなり。

心よ、何物も恐るる勿れ、心よ、今度こそ彼女を見出すならん、

見出さんとするは彼女自身にて、戸口の幕や長椅子の香氣に残せる

苦悶の影にあらじ。

彼女通り過ぎなば 部屋蛇腹の唐草新しく花咲き笑へり、

彼方の鏡は帽子の羽毛揺れるに戀して煌めけり。

二

日は過ぎゆき、

求むべき戸は續けり、

われ新しき運命を試みたり……

廣き家は翼面より中央へと列を描けり。

されど機會は依然として異ならず……われ入らば彼女出でたり。

われ終日を費して彼女を追ふ、もとより意に介せじ、

さなれど君の知る如く夕暮迫り來る……調ふべき部屋の數かず、

尋ねべき戸棚、また切望をかける床の間残り居れり。

本詩の表面では人生の家に同棲してゐる譬の女を終日空しく尋ね廻るといふことである。それは即ち一生の間尋ねても愛に出會はないといふことである。女は愛を象徴し終日は即ち一生の象徴である。「見出さんとするは彼女自身にて、戸口の幕や長椅子の香氣に殘せる苦悶の影にあらじ」とあるのは、戀から受ける悩みを求めてゐるのだといふ意味。「彼女通り過ぎなば部屋蛇腹の唐草新しく花咲き笑へり、彼方の鏡は帽子の羽毛揺れるに應じて煌めけり」とあるのは戀の名残がいつこにも偲ばれるといふことをいつたものである。然し眞實の戀は一生を通じて尋ね廻つてもそれを掴むことが出来ない……人間はイタチゴッコばかりしてゐて一生を過して仕舞ふ。即ち「機會は依然として異ならず……われ入らば彼女出でたり」である。然し私共は失望してはゐない。日暮れて戀にめぐり會はず、まだまだ探索すべき部屋の數が澤山残つてゐても、それを私共は徒に驚いて戀の探求を止めてはいけない。

追憶

一

ああ、君は嘗て實際のシエリーを見たか、
彼はたち止り君に話しかけたか。
そして君は彼に答へたか。
そが如何に不思議にて新しきや。

二

然し君はその前生きて居たりき、
その後も生きたり：
われ追憶を語り始めたり、
君はわれを見て笑ひこけけり。

三

われ荒野を横切れり、恐らくその名ありて、
疑ひなく何かの役にたつべし、
されどその掌大てのひらの場所のみ
廣がる數哩の空地を輝かせり。

われその雑木の原にて
 脱け落ちたる鷺の羽毛はね一本を拾ひ、
 そを懷中に納めけり、
 さて、その餘のことは忘れぬ。

ブラウニングの處女詩集無名出版の『ボウリン』は彼の二十歳の作品で、全くシエリーの影響で書かれたものである。いふまでもなく素人じみた未成品であつたので、出版者を得ることが出来なかつた。それでブラウニングは伯母のジェムス・シルヴァーソン夫人の出費で印刷はしたけれども、作者の名前を詩集の扉に入れなかつた。今日世に残つてゐるこの詩集の初版は珍書中の珍書として取扱はれてゐる。倫敦サウス・ケンシントン博

物館所蔵のカピーにはブラウニング自身で書かれがしてある。その文字にかう書いてある、『本詩集は一時私を熱烈に動かした馬鹿げた計畫を追求して書かれたもので、そのなかにどの位違つた人物が取扱つてあるか知れない。要するに「今日愚者の極樂園」に生長した「人生の木」の残つてゐる所はただこれだけである。』『ボウリン』の出版後二十年たつてロセッチが本詩集はブラウニングの作に相違ないと、圖星を指すに至るまでブラウニング自身も口外する所がなかつた。前にいつたやうにシエリーの影響で書かれたもので、シエリーをなかで『太陽を歩く人』と呼びかけてゐる。『太陽を歩く人よ、生命と光明とが永久にあなたのものだ、太陽を歩く人よ、私は神様と眞理と愛とを疑ひません』などといふ句が見出される。ブラウニングのシエリー熱は彼が十六歳の時、シエリーの『クキーン・マップ』を始めて讀んで非常に感動させられた以來であつて、その熱度は一生を通じて衰へなかつた。ブラウニングはシエリーにかういふ言葉も書いてゐる。

『當然來るに相違ない憂鬱な時には勿論だが、主として私の死ぬ時に、是非共あなたが私と共にゐてほしい。

なぜなら、私の死ぬ時きつと巨人と戦争する爲め眞暗のなかへ
 出掛けるやうに思ふであらうから……だがあなたは永久に生き、

あなたが私に對してあつたやうに皆の人々にもあつてほしい。』

しかして本詩『追憶』もシェリーに捧げた敬意の表現である。原詩は『メモリア』となつてゐて、それは記憶すべきものといふ意味であるが、私は單に『追憶』の二字に變更した。偉人に會つたそしてその偉人が物をいつて呉れたといふこと位人生の驚異はない……所で本詩は一度シェリーに會つたことのあるといふ人を藉りて、その驚異を敘べるのである。『われ追憶を語り始めたり、君はわれを見て笑ひこけけり』といふのは、シェリーに一度面接の機會を持つたといふ人の談話からいろいろのことを思ひ出した、自分の感激が尋常でなかつたのでその人は不思議な顔付で私を見て笑つたといふのである。それからブラウニングはシェリーから數哩に互る茫漠たる平野のことを考へた。彼はその平野を歩きながら一本の『脱け落ちた鷺の羽毛』を拾つた。恰もそれは茫漠たる平野のやうな人生を歩いて偶然にシェリーに面接することが出来たが如くである。ブラウニングはその拾つた羽毛を大事に懐中に入れた。そしてその他平野のことは忘れて仕舞つた……恰も偶然にシェリーに面接した人が彼だけのことを心のなかに納めて、他の人々のことを忘れたと同じだ。

本詩は實に暗示的な作品である。ブラウニング小品中の逸品として世に推擧していい。

デ・ガスチブス

(蓼喰ふ蟲も好きずき)

君が樹木の愛者にして、
その愛地上に残らば、
必ずや君の幽靈は英國の籬まがきに顯はれ、
虞美人草ひなげしに搖れる麥畑を歩くなるべし。
靜かに靜かに！ 榛の林に二人のものあるを見ん……
少年少女なるに於ては更に結構ならんか、
互に戀を語り合ひ、
彼等ぞ仕合者なるべし。

君は月光を離れて側に避けざるべからず、
そして彼等をして通り去らしめよ、（彼等もまた間もなく地上を
去るに至らんが）

彼等今は荳の花盛りにて、
黒鳥の歌面白き身なり、
即ち五月六月の二つを迎へるなり。

わが世界に好む最善なるものは、
風叫ぶアペナインの谷、
絶壁の捲きのぼる所に立つお城なり。
（若しわれ墓場の口を出て
形骸の羈絆を脱し、
再び愛する國中の國を訪れ得なば、）

古きわが友よ、われ遙か南にあたる
海岸の家にあるのを見るなるべし。
蟬旱魃に焼き殺され、
一本尖れる樹木立てり……そは絲杉の木なり、
數百年を経て幹赤く錆び、
葉は鐵釘に似て暴く、熟した果實その全身を蔽へり、
これ水邊の砂原を守護する哨兵なり。
わが家の前や如何と見るに、
大きな瑠璃紺色の海擴がりて
少しも破るる所なし。家の内には
壁畫ここそこに頽れて、
その隙間より蠍スコルツヤシは這へり。
素足の一少女來りて鋪石の上に

青甜瓜まきむりいくつを投げだせり、

しかしていふ……今日新聞あり、王様撃たれ、

弾丸右腕を貫けり、

吊帯もろ共ブルボン家斃れよ。

彼女は下手人の捕へられざるを願へり。

伊太利亞、ああわが伊太利亞よ！

メリー女王の言葉を藉らんに……

(運命利あらずして

カッスを失ひし時)

わが胸を開かば

刻して『伊太利亞』とあるのを見るべし。

われ伊國とは古き愛人なり、

常にかく有りき、また將來もかく有るべけれ。

伊太利亞ヴェニスに於けるブラウニング終焉の家ブラザ・ルエゾニコの外壁に、『わが胸を開かば刻して「伊太利亞」とあるのを見るなるべし』の文字が取りつけてある。彼の伊太利亞に捧げた熱烈な愛は譬へるにもなしといふ位であつたらしい。本詩の表題は『蓼食ふ蟲も好きずき』に當て嵌る羅典語のデ・ガステブスである。人毎に癖はいろいろとあるから我には許せ敷島の道ではないが、自分が死んで幽霊となつたら必ずや昔馴染の伊太利亞を訪れるといふのである。

本詩の最初の方は、君が樹木を愛する人間で死んで幽霊となつたならば、必ずや英國の田園を訪れて『虞美人草に揺れる麥畑を歩くなるべし』とある。そしてその時戀の少年少女が村の中で話し合つてゐるのを見るであらうが、彼等の邪魔をしてはいけない。月光が落ちて君の姿が明瞭になり彼等を驚かしてはなほ更悪いから、そつと側に寄つて彼等を通りすこさせねばならない。『彼等今は葦の花眞盛りにて、黒鳥の歌面白き身なり、即ち五月六月の二つを迎へるなり』とあるのは、青春盛りなる彼等は花の五月と若葉の六月と

を一緒に迎へたやうなものだといふのである。黒鳥といふ鳥は無いであらうが假りにブラック・バードを譯したのである。それからブラウニングは自分が幽霊となつたなら昔住みなれた伊太利亞の家を訪問するといふ段になつて、ありし昔の經驗を物語つてゐる。甜瓜を持つて来た少女の話しに『王様が撃たれた』といふ。そして彼女は『吊帶もろ共にブルボン家訪れよ』と呼ぶ……右腕の下を撃たれた王様は吊帶してゐるといふ心持で『吊帶もろ共に』といつたのである。そしてブルボン家とは時の王様佛蘭西のブルボン家から出た西班牙の分系であつた専制君主を指してゐる。『運命利あらずしてカリスを失ひし時』仰しやつたといふメリー女王の言葉を借りてとあるが、このメリー女王はヘンリー八世の女王で西班牙王フキリップと結婚して、佛蘭西と戦端を開いて遂に王國中の寶石と叫んで大事がつてゐたカリスを失ふに至られたのである。ブラウニングは女王の言葉をもぢつて『わが胸を開かば刻して「伊太利亞」とあるのを見るべし』といつたが、女王は『わが胸を開かば刻して「カリス」とあるのを見るべし』と仰せられたのである。本論はかなり愉快に伊國の地方色が出てゐる面白い作である。

廢墟に於ける戀

静かな色した夕日が
數哩に互つて、
寂しい牧場に微笑み、そこには
半分眠つた羊共が、
道草を食ひ或は葉つばを嚙んで
たち止り、
薄暮の家路をチリンチリンと音させる。

二

ここは嘗て偉い賑やかな町の跡で、
(人の話に依ると)

私共の國の都であつた、古い昔からここで王様が
朝廷を開かれ、様々の會議をなされ、
平和にしる戦争にしる、
恐ろしい勢力を振はれたさうだ。

三

所が今は、御覽の通りだ、
一本の樹木さへあつて

136

青々した山腹の見境だもしてゐない、嘗ては山から流れる

細流が、

ここを區切つてそれで名前を與へたものだが、
今は一面の原つばだ。

137

四

昔は圓屋根堂々たる宮殿が火のやうに
尖塔を打ちあげ、
圓を描いて都を圍んだ城壁には
百からの門があつて、
その上を十二人が竝んで、
歩を進めた、押合もしなかつた。

五

所が今は、御覽なさい、未だ曾て草が
こんな完全に澤山茂つたことはない。
麥時なれば青い敷物が擴つて、
石か切株に過ぎない、
ただ想像するのみの町の名残を
埋めてゐる。

六

古い昔は
多くの人が歡喜よろこびと悲みとを息した、

名譽欲がその心を刺した、
恥辱が彼等を恐れさせた 柔順にした。
そしてその名譽も、その恥辱も一樣に、
黄金の賣買する所であつた。

七

所が今は、見渡す平野に
残るは一つの小さい櫓やぐらのみで、
金蓮花のうぜんぼんや葫蘆へうたんが生繁り、
這ひ廻つて、
膏藥はつたやうな石蓮華の花が
その割れ目から目ばたきしてゐる。

地下室を見ると古い時代に塔が
堂々と立ち上り、
それを取り巻く競馬場が
競技の戦車に打たれて火を發し、
王様やお部屋様や奥方が
御見物になつたことを語つてゐる。

今かく静かな色した夕暮が
微笑んで、

多くのチリンチリンと音する羊共を
安らかに圍かこのなかへ歸らせ、
山腹も細流も漠然たる灰色に一つとなつて、
融け合つてゆく時、

私は熱心な眼まなこ 黄色の髪した小娘が
櫓のなかで待つてゐるのを知つてゐる、
そこは昔王様御叡覽の際、目標めがけて競技者が
勝を争つた所だが、
今彼女はそこで無言に息を殺し、
私の來るのを見詰めてゐる。

思ふに王様はここかして、遠く遙かに、
 都を見下し給つた、
 すべての山に聳える殿堂、すべての谷を縫ふ廻廊、
 すべての土手道、
 橋梁、水路……しかして
 人民の雑沓。

然るに今私の來るのを見て彼女は一言も發しないであらう、
 二つの手を

私の肩に置いて立ち、まづ眼で
 私の顔が與へる最初の抱合に答へるであらう、
 そして私共は相擁し合ひ、
 私共の眼も口も絶滅して仕舞ふであらう。

昔彼等は一年の内に百萬の兵士を
 南や北に送りだし、
 高く天に冲する眞鍮の圓柱を
 神様に築き、
 その上武装した千の戦車を豫備してゐた……
 もとより黄金製のものだ。

お心よ、凍る心よ、燃ゆる心よ、
今大地は

愚行喧騒罪惡の幾世紀に應報する、
偉業名譽、いなすべての一切を捨てて仕舞へ、
戀愛ぞ至高なりだ。

たとへ詩人がどんな戀愛至高説を筆で歌つても、實行でそれを裏書しない限り左程尊敬に價するものでない。ブラウニングは私共が歐洲中世紀の物語中に見出すやうな戀愛を實際に行つた詩人である。故に彼が詩の上に驚異と美のロマンスを織出した時、私共は喜んで彼の物語に謹聴せざるを得ない。ブラウニングと夫人との戀愛生活は近代稀に見るロマ

ンスである。彼は恰も幽閉の孤城から美人を助け出した中世紀の騎士のやうなもので、夫人は彼に對し戀愛と共に恩義の一種を感じざるを得なかつた。彼女は彼が輝やく戀の光線で薄暗い人生の部屋を照して呉れたことに對し厚い感謝の涙を流した。如何にブラウニング夫人が夫に尊敬と戀愛を感じてゐたかは、彼女のソネット集を讀めば明瞭である。しかしてブラウニングの方も夫人にどの位感謝してゐたかは、彼が千八百五十五年の出版詩集中に入れてある『更にもう一言』といふ序詩で説明し盡してゐる。いな『更にもう一言』を待たなくても、彼の書いた戀愛詩のいづれを讀んでも明かに戀愛に對する態度を知ることが出来る。そして本詩『廢墟に於ける戀愛』も彼の戀愛至高説を明瞭ならしめる作品中最も代表的なものである。

ブラウニングの戀愛説を論ずるに當つて誰も引合に出さうとする所の一篇が即ち本詩である。表題の廢墟とは昔全盛を極めた町が今草薙たる平野となつて、『残るは一つの小さい槽のみで、のうぜんばれん金蓮花やへうたん葫蘆が生繁り、這ひ廻つて、膏藥はつたやうな石蓮華の花がその割れ目から目ばたきしてゐる』所である。そしてこの廢墟を年若い男女が嬉々たる場所としてゐて、今女は前記の槽のなかで男の來るのを待つてゐるのである。『……今私の來るのを見て彼女は一言も發しないであらう、二の手を私の肩に置いて立ち、まづ眼で私の顔が

與へる最初の抱合に答へるであらう、そして後私共は相擁し合ひ、私共の眼も口も絶滅して仕舞ふであらう』と男はいつてゐる。これは若い男と若い女とが相會する刹那の狂喜状態を歌つた言葉で、『眼も口も絶滅して仕舞ふであらう』とあるのは、彼等の顔と顔とが相接してものをいふ口が塞がれ眼も見えなくなることを簡単にいつて退けたものである。

本詩の價值は描寫の精緻巧妙なる點と韻律の整然として調和のいい節奏にあるが、私の邦譯では原詩の韻律を傳へることが出来ない。筆者ブラウニングは千八百五十三年の冬羅馬の平原に立つて羊共の鈴の音を聞き、今昔の感に打たれたので本詩の著想を得たといふことである。然し本詩の廢墟はどこを指したものでなく、全く筆者の架空的想像から生れたのである。最後の一節、『今大地は、愚行喧騒罪惡の幾世紀に應報する、偉業名譽、いならずべての一切を捨てて仕舞へ、戀愛ぞ至高なりだ』を敷衍説明するが爲め、前へ十三節を附け加へたものだが、昔と今とを比較させて感慨の情深かしめる所に本詩の妙味が漂つてゐる。實に名詩である。

媾 曳

耳の端でがちやがちや何を仰しやるの。

『私は今死んで行きますが、

浮世は涙の谷だつたと思へといふのですか。』

そいつは困りますね。

二

薬罫が机の縁にずらりと
居ならぶ所に、再三でて来る光景……
それが郊外の細道で、
塀が寢床の脇まで續いてゐるやうです。

三

その細道が坂になつてゐます、丁度行列した薬罫の恰好ですな、
家へあがると庭の塀ごしに
よくそれが見えます、健康なお目に
カーテンの色は緑ですか青ですか。

148

四

私の目には塀や細道に緑に擴がる
馴染は古い六月の空に見えます、
エーテルと貼紙してあるずつと向ふの罫が
一番天邊の高い家に見えます。

149

五

この罫の栓の邊がテラスのやうに見えて、
そこからある六月の日、一人の少女が
私の來るのを待つてゐました。それや、あなた、不都合のことですらう、
私のやくざな頭は調子つばづれでした。

そこへ行くにはただ一本の道……それに何しろ、
少女の兩眼を除いて、すべての眼を誤魔化すために、
道の小隅にかくれて歩かなくちやいけなかつたのですよ。
家には何とか莊といつたやうな名前が附いてゐましたけ。

どんなのらくら者でもこの細道を歩く權利なんて有りやしません。
だが親切な塀のお蔭で家のまぢかへ接近しました……
でも澤山の眼が鈴のやうに張り詰めて
おやと叫ばれてはとおつかなびつくりでした。

だが幸に少女も私も見つかりませんでした。
少女は屋根裏の部屋を出ました……ほら、ほら、
エーテルと貼紙した薬罫の縁へりにその部屋が見えます。
そして彼女はそつと階段を下りました。

彼女は薔薇で飾つた門に立ちました。
ああ、ああ、
二人は戀をしました、媾くわうをしました。
悲しい悪い、氣違ひじみたことでしたが、

それやどんなに嬉しう御座んしたろ。

本詩は極めてブラウニング張りの戀愛詩である。それに漲る新鮮な情調ははち切れさうである。死の刹那にも地上生活に憧憬れる、即ち戀愛に對する熱望が巧妙に描かれてゐて、その枕邊に僧侶が坐つて何か引導じみたことを喋つてゐる。それで瀕死の男は『耳の端でがぢやがぢや何を仰しやるの』といふ。彼はどうしても浮世を悲しい涙の谷であつたとは思はれないのである。彼は今机の上に置いてあるいろいろの藥櫃や部屋のカーテンを眺めると、それ等がいつの間にもやら郊外の細道や戀人の家に化けて來るやうに感じた。彼の頭のなかに戀人と媾曳をした光景が浮いて來るのである。かういふ詩を書く段になると、ブラウニングは天下無敵である。

本詩、原の名は『懺悔』となつてゐるが私は『媾曳』と改めたことを斷つて置く。

女の最後の言葉

ねえ貴方、泣いたり争つたりして、
喧嘩するのは止めませう、
以前のやうに仲直して、貴方……
寢て仕舞ひませうね。

二

言葉なんてものは亂暴なものですわ。
わたしと貴方と、
議論してゐると、まるで鳥よ……
鷹が木にとまつてゐます。

三

御覽なさいな、ね、私共がお喋りしてゐると、
鳥の先生は勿體振つて歩いてゐますわ。
もうお喋りは店を仕舞ふことにして、
頬つぺと頬つぺに致しませう。

154

四

ねえ貴方、眞實のやうに
嘘つぱちがあるでせうか。
蛇が口を開いて齒を出す所は、
木をよけませうね……

155

五

林檎が赤く實る所は
覗かないことにしませう……
さもないとイデンの花園が臺なしですわ、
イーブにしても、私にしても。

六

神様になつて下さい、
魔法をかけて私を握つて下さい、
男子になつて下さい、
腕で私を掴んで下さい。

七

ねえ貴方、教へて下さい、
覚えませうからただ教へて下さい、
ねえ貴方、私あなたの言葉を話して、
あなたの考を考へますわ。

八

おとなしくせよと仰しやれば、それも承知、
肉と靈……
二つの御要求、
喜んであなたのお手に差上げます。

九

だがそれは明日からのことで、
今晚ぢやないのですよ。
私は見えない遠くに
悲みなんてものを埋めますわ。

でもね貴方あなた、少しばかり泣いてもよくて、

(私は馬鹿ね)

もう寝ませうね、貴方あなた、

可愛がつて頂戴！

失はれた戀人

それぢやこれでお仕舞ですね。眞實まことは苦にがいですね、
誰も最初思つた通りですが。

お聞きなさいな、雀うさぎが家の檐で

お寝やすみなさいと囁ささつて居ります。

二

葛^{つたかづら}の若葉が綿のやうです、
今日それに氣が付きました、
もう一日も立つとはつきり開いて、
御承知のやうに赤い色が灰色に變ります。

三

それぢや明日もいつものやうにお目にかかります。
あなたは手を握らして下さるでせうね。
私共はもうただの友達なので……このただの友達といふなかへ
澤山のことを捨てて仕舞つた譯なものです。

160

四

あのあなたの眼の閃き、あんなに黒く見事でした、
そりや勉めて心のなかに納めてはゐますが……
あなたが雪^{スノウドロフ}の花を返へせと仰しやつた時のあなたの聲、
それや永久に私の魂に止つてゐます。

161

五

だが私はただの友達としてあなたとお話をしなければなりません、
それでも心持ほど強めて……
私はあなたの手を友達として握れるだけ長く握りませう、
でも少し位長くてもいいでせうね。

二 聲 曲

男の唄

一

われ等過ぎゆく、滑りゆく、
あの憐れなるアグネスは今いかに、
鎧戸かたく鍵しけり。
サノビ爺しろめたまの白頭、金で買ひたる花嫁を

寢床へしつぽり連れんとす。
われ等過ぎゆく。

二

われ等過ぎゆく、滑りゆく、
プツチ御殿の目映まばゆき光、
嵐を輝らす烽火のろしの如し。
よしや殿様首ねぢれんも、
百の客人だれ意とせんや。
われ等過ぎゆく。

女の唄

一

初手は蛾の接吻^{キス}……
わたしの顔はお前の花よ、
夕宵どうして花瓣しめたと、
知らぬ顔して接吻^{キス}してよ。
これでお前は撫で廻はし、
わしはお前の御用を知つて
ぱつと心を開けまする。

二

さてその次は蜂の接吻^{キス}……
眞晝浮かれて、わが胸へ、
いざ入らしやんせ、接吻^{キス}してよ。
否む氣はない私は蕾、
お心任せにしますぞへ、
破れし盃うつむけて、
お前のおつむに眠るぞへ。

この二つの唄は『ゴンドラのなかにて』と題する戯曲的小詩より取つたもので、假りに『二聲曲』と題してここに入れたのである。詩全體の表題がゴンドラのなかにてとあるから、いふまでもなく昔のヴェニス時代の材料にした作品であることはいふまでもない。その時代に於けるゴンドラは戀や陰謀の密會所であつた。本詩は政敵の見張りを逃れ死の影に追跡されてゐる男が女を船中につれ出して、互にやる瀬ない戀と思想を語つたもので、詩の最後が男が船を離れ陸へ上るや否や直につき殺されることになつてゐる。然し私共の本詩に關する興味はその筋になく、男女のものが死を賭してまでも戀の一時的歡喜に酔ふといふ感情の雰圍氣にある。ここに擧げた小唄はその詩を飾る寶石である。二つのなかで後の方即ち『女の唄』は英詩中で有名なものになつてゐる。柔和な接吻と暴つぽい接吻を蛾と蜂になぞらへた所がブラウニング得意の著想である。最初は丁度蛾がつぼんだ花を撫で廻はすやうに、閉ぢた唇を接吻して呉れといふので、後の方は蜂が花のなかへ釘を突きこむやうに接吻して呉れ、自分は口を開いて愛を受けるといふのである。

小唄

○神はすべての奉仕を一と見給ふ。
嘗て樂園を歩ませ給ひし如く、
若しや今地上に顯はれ給ひなば、
われ等は御意を奉じ、ただ働くのみ。
善人も悪人も神の傀儡、
われ等に最初も最後もなしと知れ。

小事件といふ勿れ。何故に『小』ぞや。

世にいふ『大事件』に苦病^{くるしみ}まさるものありとても、
『小事件』と輕視する理由いづこにあらんや。
生命を作る行爲^{おこなひ}の群集^{あつさり}から自らを解^ときほどき、
一つの行爲^{おこなひ}に忠なれ……力及ぶも及ばざるも。

本唄は『ビバは過ぎゆく』のなか彼女がまた街上に顯はれない前即ち自分の貧しい部屋
のなかにゐてその腦中に響いた小唄である。『年は春、日の朝』の小唄と共に有名である。

小唄

—

天地互により近く、
世界は若さしののめの
遠き昔に王ありき。
長く垂れたるちぢれ毛に
深く埋れる前額は
御供^{ごこ}に引かれる大牛の

角と角とのあひの間を
白く塗れるに異ならず、
その静けさは赤坊の
微笑むさまにさも似たり。
憂ひの歳に寄せられず
老い朽ちること知らずして、
うとうと眠り給ひにき。
(御空の神は夢を見る
彼をかくまで愛しけり)
されば長らく生き給ひ、
死ぬるべしとは見えざりき。

二

岩間に彼は都しき。
御殿のみ前太陽を受けて、
平たい石の階段に
坐りて人を打ちまもり、
萬の^{よろづ}ことを判きけり。
或は羊の檻^{かぎ}あらず
谷間住ひの大泥坊、
或は無恥にて悪相の
瞞^{あや}著自慢の乞食奴等、
或は怪しき間諜^{あや}や
濱に打ちあげ捨てられし

海賊船のあらくれ男、
一々王は判きけり。
時には唇血をぞ吐き、
頬を燃やして女子か
王の御前にひれ伏して、
性悪る男を訴へけり。
また或時は隙間より
芋蟲のごと膝と肘、
腹と胸とを潜らせて
寺へしのべる無頼漢、
和尚引立て來りけり：
闇夜にも神はあちこちと、
金碗見守りし給へば、

如何ぞ悪人盗み得んや。
王はすべての罪人を
日向に坐り判きけり。

三

左右に居竝ぶ大臣は
氣づかはしげに見上げけり、
されど如何なる驚きも
王の笑む目を騒がさず、
陰氣な藍は白かりき。
あの日大蛇の現はれて
舌と眼に火をぞ吹き、

息なき町を驚かし、
王の御前に來たりけり。
毛深き王の頭上に、
森林の祭に乙女等が
篝火赤き祭壇に
歌ひつ舞ひつ著飾れる
寶石にも増して珍らしき、
冠つけるを見たる時、
大蛇は驚き、微笑める
老いたる王を襲ひ得ず、
太陽に輝やける階段を
遙に遠く去りにけり。
實に世界の若き時、

世を治めたる王様は
かくも氣高き徳ありき。

本小唄も詩劇『ピバは過ぎゆく』の内夕景の場面小塔のなかで、青年志士を以て任ずる
ルイギが聞くピバの小唄である。唄の第三節中『王の笑む目を騒がさず、陰氣な藍は白か
りき』とあるのは、原文にブルー藍色即ち陰鬱或は氣が塞ぐといふ意味のある言葉が使
つてある、詰り眼の光の藍色に引かけて使つてあるので、そのまま私は『陰氣な藍は白か
りき』と譯したのである。即ち王様の眼には陰鬱な點がなかつたといふ意味であらう。

小唄

愛して下さんすかへ……わたし待ちます、
お前の愛が延びゆく限り。
胸にさしたるお前の花は、ありや、六月が
四月の種を育てたものよ。

手づかみの種を蒔きます、一つや二つ
多分芽を出し、花と咲くのは、
お前も捨てぬであらうが、

戀といふもの……いえ、戀に似たもの。

戀の亡軀眺めてお呉れ、
墓場にさしたる一つの莖……
お前の一目千の苦痛を打ち消すわいな。
死なんて何でもないの……お前愛して下さんすかへ。

本小唄も『ピパは過ぎゆく』のなかに見出される。

前を望め

死を恐れるとや……胸に濃霧を感じ、
顔に霞かかり、

雪降り始め強風荒れる時、

われ彼方に近づくのを知る、

暗夜の力、暴風雨の壓迫、

そは敵の陣營なり。

よしや『恐怖の大王』姿を顯はすとも、

強人いかんぞそれを恐れんや。

旅は終り山上に勝ち、

關門落ちたりと雖も、

最後の報償を得んには

なほ一戦を要せずんばあらず。

われ常に戦士なりき……さればもう一戦争、

いざや最終最善の一戦に立たん。

若し死わが目に帯を巻き、

直におとなしく匍匐し去れと命ぜんも、わが肯んずる所にあらず。

斷然として『否な』われをして戦争の全部を味はしめよ、

われをして戦争の全部を味はしめよ、

古英雄の如くあらしめよ、

激戦に堪へ、われをして喜んで直に

苦痛、暗黒、冷寒さては拂ひのこしたる殘金を拂はしめよ、

勇者は正に知らん、最悪忽ちに最善に變じ

暗黒の瞬間ここに終り、

自然の憤怒、悪魔の叫び、

その聲衰へ交はつて一つとならん、

再轉して始めて平和となるに至らん、しかして歡喜、

しかして光明、しかしてお前の胸となるに至らん……

おお お前こそわが魂たましひの魂なれ。われ再びお前を抱かば、

餘はみな神に任かすべし。

本詩は英雄詩人の宣言である。ブラウニングは千八百六十一年に最愛の夫人を失つて悲痛な死に直面した。彼は死を凝視して本詩に歌つてあるやうに、それに暗夜の力と暴風雨の壓迫を感じ「敵の陣營」であるとしたが、勇者はそれに對して最後の一戦を試みなければ

ならない。さもないと眞實の平和歡喜光明を得ることが出来ないと思つた。即ち本詩は人生最後の戦争に向ふ勇士の決意を歌つたものである。詩の最後に「しかして光明、しかしてお前の胸となるに至らん……おおお前こそわが魂の魂なれ」とあるが、死に打勝ちて光明を捨てた時、彼の眼前にその光明の變じてお前即ち逝きし愛妻の姿と顯はれるのを見たのである。彼は愛妻と一つになるといふことが「最後の報償」であつたのである。そして彼に對する愛妻は平和歡喜光明のシノニムであつて、死の戦争に打勝たなければ、それを支配することが出来なかつた。

跋 詩

静かな睡眠時の眞夜中に、
君は想像を自由に驅せ、
嘗て君を愛し、君から愛された者が……
愚人は死に檻禁されてゐるといふかも知れないが……
地中低く横はつてゐる所に考へ及んだことがあるか、
して僕を憐んだことがあるか。

ああ、あんなに愛しあんなに愛され、なほ誤解されるとは情無い。

僕は懶惰な懦弱な、卑怯な奴とは何の係りがなかつた筈だ。
僕は目的もなく、力もなく希望もない人間として徒に
暮したらうか。
どういふ人間だつたか君は知つてゐる筈だ。

一度も背中を向けなかつた、前へと胸を張つて進んだ、
雲は破れることを疑はなかつた、
善が虐げられても悪が勝つべしとは夢にも思はなかつた、
倒れるのは立ちあがらんが爲め、妨げられるのはより能く戦はんが
爲め、

眠るのは目覺めんが爲めだと信じた人間であつた筈だ。

人の忙しい労働時間の正午に、
目に見えない者へ歡呼を浴せかけて呉れ給へ。
胸を前へ張るも後へ向けるも、前へ進めと命じて呉れ給へ、
呼んで呉れ給へ、『努めよ榮えよ、前進だ……永遠の戦ひだ、
天國に於ても地上と同じやうにやり給へ。』

本詩はブラウニング最後の詩集『アソラランド』の跋詩であるが、移して以て彼の辭世と
見ることの出来る作品である。第三節に歌つてあるやうに、『倒れるのは立ちあがらんが
爲め、妨げられるのはより能く戦はんが爲め』の理想を持ち、最後に眠るのは目覺めんが
爲めといふ死後の希望さへ高唱した勇士の面目は躍如たるものである。第二節の『僕は懶
惰な、懦弱な卑怯な奴とは何の係りがなかつた筈だ』とあるが、それが原語では質問體に
なつてゐる。自分が語らない人間と生前伍して生きたものならば、誤解されて氣の毒がら

れるのは當然かも知れないが、自分の友達はそんなやくざな人々ではなかつた、それで浮
世を去つたが爲めに憐れまれる筈がないといふ意味である。本詩と前詩『前を望め』とは
ブラウニングに無くてならない人生觀の大宣言である。實にこの戰士の雄姿こそ古今獨歩
の壯觀であると云はねばならない。

後記

私は想像で二人の男女を見る。男は三十五六歳の分別盛り、女は三歳の年上で四十に手の届くといふ世間でいふ姥櫻。

男は發達の立派な體と、豊饒な銳氣のある精神に對し、兩親から遡つて祖先へ深い感謝を捧げる。彼は進化論の信者で、上調子な一時的な、センチメンタリストでない。彼は腕をたいて中に太い骨が入つてゐることを喜び、骨ぶとな健康のお蔭で完全に人生を味ふことが出来る男だ。彼は燃えるやうな情熱の男だが、その情熱は合理的に動く感情の節約に原因してゐると信じてゐる。體の弱いのが詩人の身上だといふ傳統的なセンチメンタリズムを見事に彼は打破つてゐる。

ひ後れたが彼は詩人である。しかも偉い詩人である。その健康は彼を極點に走らせない安全瓣だと彼は思つて來たが、今私がここに書かうとする時に於ける彼は、確かにその感情は極度まで戀愛の酒杯から溢れてゐる、それでも彼の立派な健康は樂々と、この驚くべき感情の戀愛を擔つて行くやうに思はれる。

彼はロバート・ブラウニングである。

ブラウニングは藝術的衝動を巧みに理智の力で整理する……それは父方から受けた特質である。ブラウニングは神祕な戀愛と獨逸張りの哲學心とを音樂化する……それは母方から受けた特質である。彼は、即ち詩人ブラウニングはオックスフォード出でもなければケンブリッジ出でもない。今日米國邊ではやるセルフ・メード・マンで、學歴からいふと無教育でも彼の心は眞實に發達してゐた。彼の思想は中心歸衆の藝術を行ふことが出來た。彼の無教育位尊いものはあるまい。若し彼が今日生きてゐたならば、今日日本の教育のやうに詰込式に一日も厄介になつて居らない事を喜ぶに相違ない。大學教育とは何だ。自分の心を宇宙との關係の上に自覺せしむることの外何物であるだらうか。彼は眞實の教育を自分の手

で自由に行つた。そして彼は將來歩かねばならない希望の路を見出した。彼は獨立獨歩の自由人であつた。然し彼は自分の教育に對して感謝する所がある、彼は時々出版される小説に、倫敦の市街に、グローブ座といふ劇場に對して感謝した。カムバウエルに於ける彼の父の圖書館と倫敦の英國博物館とを別にすると、それ等三つのものに彼は負ふ處が多かつた。彼はそれ等五つのもを自分で作つた人生の路で結び附け、その路の上に詩を植ゑつけ、そして花を咲かせた。

「彼は十六の時シェリーのクエーン・マブを讀んで、人生の活劇を思想的に見る彼の心眼がぱつと開いた。彼が二十歳の時無名で公にした處女詩集の外澤山ある詩集は悉く人生の深い神祕の消息である。彼は處女詩集に宿つてゐる斷片的ではあるが壯大なシェリーの想像は、彼の一生を通じてその影響を及ぼしてゐる。彼は喜んでこのことを認めてゐる。シェリーとブラウニング……かういふ工合に併稱せられることを彼は愉快に思つたであらう。彼は人間世界は情の争闘であると信じた。情と云はずに戀愛といつてもよい。この争闘の結果を報告するといふことが、詩人の仕事であると彼は信じた。ウォズウォスは自然を理解してそれに人

間生活の慰藉を見出した。ブラウニングも自然へ行つてゐる、然しそれは一層新しい興味で再び都會生活に歸りたい爲めにそれへ行つたのである。今彼は都會生活に歸つて一人の女を戀してゐるのである。この女は最初いつたやうに三歳以上の老嬢である。老嬢の名前はエリサベス・バレット。

バレット嬢は相手の男に劣らない詩人である。男の方は處女作以來八冊も叔母や親から金を借り所謂自費自版せねばならなかつたが、女の方は少くも出版者の費用で詩集を公にすることが出来た點からいふと、バレット嬢はブラウニング以上の成功詩人であつた。然し私は何等の興味も彼等の比較は持たない。私の想像はバレット嬢を眺める……ブラウニングの健康と反對にこれはまた健康のない弱い體の所有者だ。その上彼女は歩行さへ自由でない不具者だ……氣の毒にも彼女は幼少の頃に馬車から落ちて脊骨を折つた。私の想像は彼女が床の上に横たはつて、少くも過去六年の半病人といふ體を書物の頁と頁との間に養つてゐる有様を見るのである。彼女の大きい眼は谷底の靜かな水溜のやうに青空の寂寞を映じてゐる。彼女の寂しい眼には一點の塵も浮いてゐない。恐らくはこの靜かな眼の水

溜りは飛んで過ぎゆく鳥の影を映さうと待ち設けてゐるであらう、が、またその鳥の影のために寂寞を亂されることをどんなに恐れ戦いてゐるのであらう。彼女は長い年月を暗い部屋の中で獨り暮して來た。その爲め彼女の感情はもの凄いほど鋭敏になつた。彼女の顔の皮膚は青白い、下を流るる赤い情熱でさへ青白い皮膚はどうすることも出来なかつた。彼女はあらゆる女詩人があるやうに感情の詩人である。戀愛の詩人である。彼女は又あらゆる女詩人のやうに、感情と戀愛を自分で煽動して置きながら、感情と戀愛が奇峰の多い夏雲のやうにむつくり上つて來る有様を眺めて獨り悲しんだ。彼女の理知は戀愛の奴隸となることを許さなかつた。それと同時に彼女の健康は戀愛の支配者たることをも彼女には許されなかつた。彼女は日に幾度なく悲觀論者となつたり樂天家となつたりした。彼女は自分でその心を冷笑した。又その冷笑の下に置かれる自分を嬉しいものとも感じた。彼女は力の弱い女であることを十分承知して居つたので自ら進んで外部と接觸して戀愛の路を開拓することが出來ず、ひそかに戀愛が遣つて來て彼女の寂しい部屋を訪問するのを待つてゐた。然しまた戀愛の訪問を彼女は非常に恐れたの

である。特に最愛の幼弟を失なつたが爲に、彼女の感傷氣分は一入濃厚になつたかの感があつた。私の想像は今ブラウニングから來た最初の戀文を讀んでゐるバレット嬢を見るのである。時は一千八百四十五年の一月十五日。

この當時、嬢に對するブラウニングは『バラセルサスの著者神祕論者の王様』であつた。この詩人から彼女は熱心の溢れる最初の戀文を受取つたのである。彼女の尊敬する詩人は、彼女の詩を稱讚し數年前ある場所で彼女を見たが紹介せられなかつたことを残念に思つてゐるに始まつて率直にその眞情を吐露してゐる。何等の躊躇がない所謂ブラウニング一流の文章で筆に任かせて書いてある。奇態な句讀の切り方をしたり隨所に點を附けたり棒を引いたり疑問の記號を置いたりした尋常一様の文體でない。手紙の中に書いてある、『貴嬢と言葉を交はさなかつたことは丁度世にも目出度い寺院の内陣へ入りかけて、何かの故障で入ることが許されない、残念至極で數百哩もすすぎ歩いて家へ歸つたやうであつた。』彼女は眼を閉ぢて幾度もこの手紙を考へた。口の中で手紙の言葉を繰返してみた。彼女は『残念至極で數百哩もすすぎ』ともう一度繰返してさつと頬を赤らめた

やうに感じた。彼女は生れて始めて恍惚とはどんなものかといふことを覺えたやうに感じた。

ブラウニングがバレット嬢と取かはした戀文は集まつて一千二百五十頁となり、二十一箇月の間に互つてゐる。實にかかる容積の大きい戀文を残したものがある。又興味を以つて人に讀ませる、敬意を以て人に讀ませるといふ點でこの戀愛の書簡に匹敵する文字は外にない。縦横な才氣と鋭敏な言葉に富むといふのでバイロンの私信文は名高い。多方面な趣味と身を刻むやうな皮肉で人を驚かせるといふのでカーライルの書簡も名高い。又美麗と力がある詩的文字で人を驚かすといふので年若く死んだキーツの戀文も名高い。然しそれ等三人の書簡に優つて詩人として圓熟した天才が戀愛の海に棹さしたブラウニングとバレット嬢との戀文からは、一緒になつて人生の不思議な運命を完成しようとする純白な戀と生命に對する尊敬と信仰とが發する眞實な聲を聞くことが出来る。この戀文に至つては私共は實に一方に麗はしく他方は健やかな二大精神が結合する姿を眼前に眺めて、これぞ正に立派な彼等の記念碑である。その冒すことの出来ない威